

相生市

# 緑ヶ丘窯址群Ⅲ

—一般県道竜泉那波線道路新設事業に伴う発掘調査報告書—



2003年3月

兵庫県教育委員会

# 相生市 緑ヶ丘窯址群Ⅲ

—一般県道竜泉那波線道路新設事業に伴う発掘調査報告書—

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県相生市に所在する縁ヶ丘窯跡群のうち縁ヶ丘落矢ヶ谷6号窯（兵庫県遺跡地図遺跡番号90216）・那波乳母ヶ懐1号窯（兵庫県遺跡地図遺跡番号90225）についての発掘調査報告書である。
2. 全面調査を行った遺跡の所在地は下記の通りである。  
縁ヶ丘落矢ヶ谷6号窯：相生市那波字袋地206-14ほか  
那波乳母ヶ懐1号窯：相生市那波字乳母ヶ懐2106-45ほか
3. 発掘調査は、一般県道竜泉那波線道路新設事業に先立つもので、兵庫県土木事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成9年度に分布調査・確認調査、平成10・11年度に全面調査を実施した。
4. 整理作業は、平成13・14年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が同事務所にて実施した。
5. 本書の執筆は池田征弘・服部寛（現兵庫県教育委員会文化財室）を行い、編集は池田が行った。
6. 本書にかかる遺物・図面・写真などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
7. 調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を仰いだ。記して感謝の意を表するものである。  
岸本道昭　野村展右

## 凡　　例

1. 本書で示す標高地は東京湾平均海水準（T. P.）を基準としている。
2. 座標系は日本測地系を使用し、本地域は国十座標第V系に属している。なお、方位は座標北を指している。
3. 遺物には通し番号を付けている。また、遺物の番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
4. 須恵器の窯跡を指す考古学用語としては、「窯跡」・「古窯跡」・「窯址」・「古窯址」などがあるが、本報告書では「窯跡」の用語を用いる。ただし、本書名についてはこれまでに刊行されている報告書名に従い「縁ヶ丘窯址群」とする。

# 本文目次

## 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過·····	(服部) ···	1
第2節 調査の経過·····	(服部) ···	1
第3節 整理作業の経過·····	(池田) ···	3

## 第2章 遺跡の位置

第1節 緑ヶ丘窯跡群の位置·····	(池田) ···	5
第2節 相生・龍野窯跡群の概要·····	(池田) ···	6
第3節 緑ヶ丘落矢ヶ谷支群の分布·····	(池田) ···	7

## 第3章 調査の成果

第1節 緑ヶ丘落矢ヶ谷6号窯		
1. 遺構·····	(服部) ···	9
2. 遺物·····	(池田) ···	13
第2節 那波乳母ヶ懐1号窯		
1. 遺構·····	(服部) ···	16
2. 遺物·····	(池田) ···	20

## 第4章 まとめ

第1節 遺物について·····	(池田) ···	25
第2節 遺構について·····	(池田) ···	38

## 挿図目次

第1図 相生市の位置	1
第2図 調査地の位置	2
第3図 調査風景	3
第4図 相生・龍野窯跡群分布図	5
第5図 緑ヶ丘落矢ヶ谷支群分布図	7
第6図 調査風景	9
第7図 落矢ヶ谷6号窯調査区配置図	9
第8図 落矢ヶ谷6号窯地形測量図	10
第9図 落矢ヶ谷6号窯窯体実測図	11
第10図 落矢ヶ谷6号窯窯体内土器出土状況図	12
第11図 落矢ヶ谷6号窯窯体支柱痕検出位置図	13
第12図 落矢ヶ谷6号窯灰原地区割図	13
第13図 落矢ヶ谷6号窯の器種構成	15
第14図 乳母ヶ懐1号窯調査区配置図	17
第15図 乳母ヶ懐1号窯地形測量図	18
第16図 乳母ヶ懐1号窯窯体実測図	19
第17図 乳母ヶ懐1号窯の器種構成	20
第18図 器形分類図	26
第19図 供膳具の比率	28
第20図 梱Cの法量	30
第21図 杯A・皿Aの法量	31
第22図 C・D段階の須恵器（1）	32
第23図 C・D段階の須恵器（2）	33
第24図 C・D段階の須恵器（3）	34
第25図 C・D段階の須恵器（4）	35
第26図 C・D段階の須恵器（5）	36
第26図 C・D段階の須恵器（6）	37

## 表目次

第1表 調査一覧	2
第2表 件数のための分類基準	4
第3表 相生・龍野窯跡群調査一覧	6
第4表 落矢ヶ谷6号窯個体度数一覧表	14
第5表 乳母ヶ懐1号窯個体度数一覧表	21
第6表 遺物一覧表（1）	22
第7表 遺物一覧表（2）	23
第8表 遺物一覧表（3）	24
第9表 編年对照表	27

## 図版目次

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 図版1 落矢ヶ谷6号窯出土須恵器(1) | 図版6 落矢ヶ谷6号窯出土須恵器(6)  |
| 図版2 落矢ヶ谷6号窯出土須恵器(2) | 図版7 落矢ヶ谷6号窯出土須恵器(7)  |
| 図版3 落矢ヶ谷6号窯出土須恵器(3) | 図版8 落矢ヶ谷6号窯出土須恵器(8)  |
| 図版4 落矢ヶ谷6号窯出土須恵器(4) | 図版9 乳母ヶ懐1号窯出土須恵器(1)  |
| 図版5 落矢ヶ谷6号窯出土須恵器(5) | 図版10 乳母ヶ懐1号窯出土須恵器(2) |

## 写真図版目次

- |   |  |
|---|--|
| 写真図版1 上：粗生窯跡群遠景（南東から）<br>下：緑ヶ丘地区遠景（北東から）  |  |
| 写真図版2 上：落矢ヶ谷6号窯 遠景（北東から）<br>下：落矢ヶ谷6号窯 調査区全景（南東から）                                   |  |
| 写真図版3 上：落矢ヶ谷6号窯 窯体・灰原全景（南東から）<br>下：落矢ヶ谷6号窯 窯体全景（南東から）                               |  |
| 写真図版4 上：落矢ヶ谷6号窯 窯体全景（南東から）<br>下：落矢ヶ谷6号窯 窯体床面遺物出土状況（南東から）                            |  |
| 写真図版5 上：落矢ヶ谷6号窯 窯体埋土断面（南東から）<br>中：落矢ヶ谷6号窯 窯体断ち割り断面（南から）<br>下：落矢ヶ谷6号窯 窯体支柱検出状況（北西から） |  |
| 写真図版6 上：落矢ヶ谷6号窯 灰原検出状況（南東から）<br>下：落矢ヶ谷6号窯 灰原断面（南東から）                                |  |
| 写真図版7 上：乳母ヶ懐1号窯 遠景（西から）<br>下：乳母ヶ懐1号窯 全景（西から）  |  |
| 写真図版8 上：乳母ヶ懐1号窯 窯体全景（南から）<br>中：乳母ヶ懐1号窯 窯体断ち割り断面（南から）<br>下：乳母ヶ懐1号窯 灰原断面（北から）         |  |
| 写真図版9 上：落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器<br>下：乳母ヶ懐1号窯 出土須恵器  |  |
| 写真図版10 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器(1)   |  |
| 写真図版11 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器(2)   |  |
| 写真図版12 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器(3)   |  |
| 写真図版13 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器(4)   |  |
| 写真図版14 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器(5)   |  |

- 写真図版15 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器（6）  
写真図版16 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器（7）  
写真図版17 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器（8）  
写真図版18 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器（9）  
写真図版19 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器（10）  
写真図版20 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器（11）  
写真図版21 落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器（12）  
写真図版22 乳母ヶ懐1号窯 出土須恵器（1）  
写真図版23 乳母ヶ懐1号窯 出土須恵器（2）

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経過

兵庫県上郡上木事務所（現西播磨県民局上郡上木事務所）は、西播磨新都市周辺整備事業の一環として、一般県道竜泉那波線道路新設事業を計画していた。具体的には、東西方向の幹線道である国道2号と国道250号を南北に結ぶバイパス道路の建設であるとともに、主要地方道相生山崎線の南に引き続いて西播磨新都市と相生市市街地を南北に結ぶ交通路として新たに計画されたものである。

しかしながら、今回の事業予定地周辺には從前より須恵器を生産する窯業遺跡である縁ヶ丘窯跡群が存在することが知られている。特に事業用地に隣接している山陽自動車道の建設に先立っては、昭和54・55年度に兵庫県教育委員会社会教育・文化財課によって10基の窯跡（落矢ヶ谷1～4・7～11号窯、乳母ヶ懐3号窯）が調査されている。

このように、今回の事業用地内にも同様な窯跡が存在する可能性が高いことから、兵庫県教育委員会では上郡上木事務所より依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成9～11年度に分布調査・確認調査・全面調査を実施した。



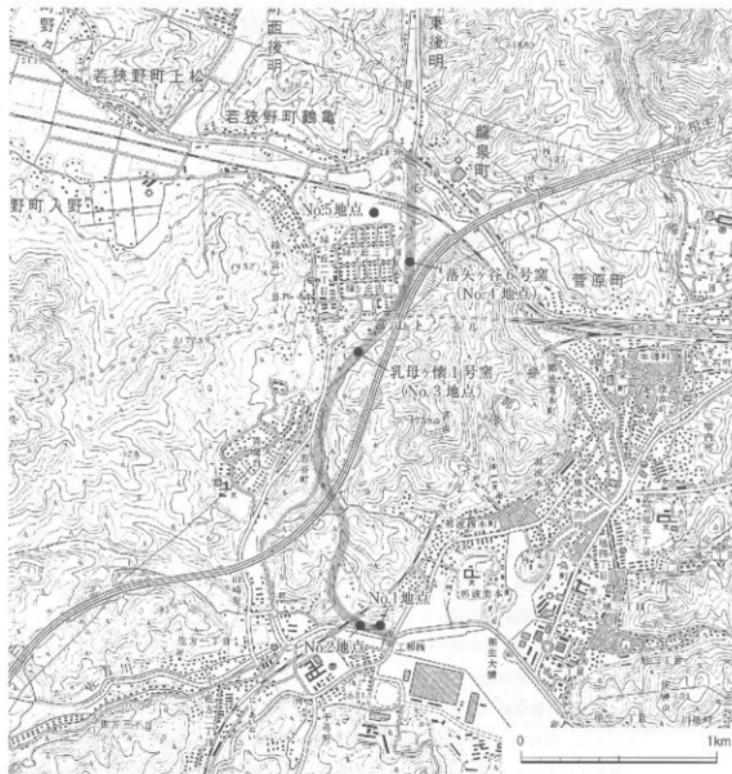
第1図 相生市の位置

## 第2節 調査の経過

### 1. 分布調査

計画対象範囲について踏査を行い、5地点で遺跡の存在を確認した。

- No.1・2地点 横穴式石室塙などの古墳を計7基確認した。  
No.3地点 現地では確認していないが、遺跡地図上に周知の遺跡である那波乳母ヶ懐1・4号窯が存在する。  
No.4地点 現地では確認していないが、遺跡地図上に周知の遺跡である縁ヶ丘落矢ヶ谷6号窯が



第2図 調査地の位置

第1表 調査一覧

調査の種別	遺跡調査番号	調査担当者	調査期間	調査面積
分布調査	970030	調査第1班 山下史朗・守岡克倫・岡昌秀	平成9年4月15日	50,000m <sup>2</sup>
確認調査	970312	調査第3班 鎌英記・池田征弘	平成9年9月11日～9月18日	770m <sup>2</sup>
第1次全面調査	980220	調査第3班 鎌英記・服部寛	平成11年1月20日～3月18日	861m <sup>2</sup>
第2次全面調査	990218	調査第3班 山上雅弘・柏原正民	平成11年9月16日	60m <sup>2</sup>

存在する。

No. 5 地点 本線に取り付く市道部分で須恵器の散布が認められた。

## 2. 確認調査

上記5地点のうち窓跡が存在するNo. 3地点とNo. 4地点について確認調査を行った。

No. 3 地点 5ヶ所でトレンチ（T 4～8）を設定し、2ヶ所で崖面の断面観察（断面A・B）を

行った。T 4 では若干の須恵器が出土しているが、灰原は存在していない。T 5 からは遺物・遺構ともに検出されなかった。T 5 の南側には乳母ヶ懐 2 号窓の存在が想定されているが、工事範囲には含まれないと考えられる。T 7・8 付近では乳母ヶ懐 4 号窓の存在が想定されていたが、遺構・遺物ともに検出されなかった。断面 A では想定通り乳母ヶ懐 1 号窓の窓体を確認した。

No. 4 地点 3 ヶ所でトレンチ（T 1～3）を設定した。当初の想定通り T 2 で落矢ヶ谷 6 号窓の灰原が確認された。

### 3. 第1次全面調査

平成 9 年度の確認調査によつて存在が確認された落矢ヶ谷 6 号窓と乳母ヶ懐 1 号窓について全面調査をおこなった。表土・包含層などの掘削や遺構の検出・掘削については全て人力でおこなった。検出した遺構については写真撮影（航空写真を含む）および実測図（航空測量を含む）の作成を行った。



第3図 調査風景

落矢ヶ谷 6 号窓 調査区は確認調査で灰原が検出された部分を中心として東西幅 25m、北側は用地境界まで、南側は谷から平場に上がった位置までの範囲で行った。

乳母ヶ懐 1 号窓 調査区は確認調査による窓体検出位置より東側へ 8 m、西側へ 13 m、北側は用地境界まで、南西部は谷中での灰原の状況を確認するために大きく拡張した形で範囲を設定した。ただし、この時には窓体正面の谷部分については立ち木補償が未済のため調査できなかつた。

### 4. 第2次全面調査

乳母ヶ懐 1 号窓 平成 9 年度の第1次全面調査で調査できなかつた窓体正面の谷部分に位置する灰原の残存部分を調査した。盛土及び表土を重機で除去した後に、灰層を人力で掘削して調査を行つた。検出された灰原については写真撮影および実測図の作成を行つた。

## 第3節 整理作業の経過

### 1. 作業の経過

平成 13 年度は、出土した遺物 281 入りコンテナにして 59 箱分について、当事務所にて接合・復元・計数・実測・写真撮影などを行つた。平成 14 年度は、遺構図および遺物実測図についてトレース・レイアウトを行つた。

整理作業は整理普及班菱田淳子（平成 13 年度）・整理保存班岡本一秀（平成 14 年度）の補

助のもとに調査第3班池田征弘・文化財室服部寛（平成13年度は調査第1班）が担当した。

また、上記の作業にあたっては下記嘱託員の協力を得た。

柏原 美音 吉田 優子 喜多山好子 真子ふき恵 島村 順子 石野 黑代  
中田 明美 前田千栄子 蔭 幾子 横山キクエ 小野 潤子 河上 智晴  
大仁 克子 津田 友子 藤井 光代 蓬萊 洋子 前田 恒子

## 2. 計数作業の方法

須恵器の計数方法には以下のようない「底部計測法」を採用した。

- ①接合作業後、底部の手法を基準に分類を行う。
- ②15°ずつ放射状に24分割された分度器をあてて、残存度数を数える。
- ③度数を器種別に集計する。合計を24で除すれば個体数が算出されるが、集計表では度数のみを示す。

第2表 計数のための分類基準

分類	分類の基準	備考
碗・皿類		
杯A	ヘラ切り底部のもの	
碗C	口縁部まで残存する碗	碗C、皿B、碗C・皿B底部の合計を碗Cと皿Bの比率で按分すると碗Cと皿Bの個体度数を算出することができる。
皿B	口縁部まで残存する皿	
碗C・皿B底部	その他ものの	
碗D	底部に輪高台をもつ	
その他	その他のもの	杯B、皿C、耳皿がある
壺・鉢類		
壺・鉢a	底部に輪高台をもつもの	鉢A a
壺・鉢b	底部が円盤作りのもの	壺B、壺C b、鉢A bが含まれる
壺・鉢c	底部糸切りのもの	壺C c、壺Dが含まれる

## 第2章 遺跡の位置

### 第1節 緑ヶ丘窯跡群の位置

緑ヶ丘窯跡群は兵庫県西部の相生市に位置する窯跡群である。相生市は播磨灘より深く切れ込んだ相生湾を中心にして広がっており、現在の市街地はその最深部に位置している。そして、この市街地を丘陵が取り囲んでおり、この丘陵部の一部に緑ヶ丘窯跡群が存在している。旧国名で云うと播磨国赤穂郡に位置する。中世には「那波野」・「那波浦」としてみられ、古代においても万葉集に見える「繩の浦」がこれに当たると考えられている。さらに承保2年（1075）の「播磨国赤穂郡司秦為辰解案」（平安遺文1113号）にみえる「歩危」の範囲は、相生市内の存在する窯跡群の範囲にほぼ相当する<sup>(1)</sup>。



第4図 相生・龍野窯跡群分布図

## 第2節 相生・龍野窯跡群の概要

相生市街地の北側を相生市から龍野市にかけての丘陵部には多くの須恵器窯跡が取り扱むように存在している<sup>(2)</sup>。それらは総称して相生・龍野窯跡群と呼ばれ、そのなかに今回調査した緑ヶ丘窯跡群も含まれている。窯跡は130基程度発見されており、未発見のものを含めれば200基を超えるものと考えられている。これまでに40基程度の窯跡が調査されている。

広範囲に広がる窯跡群は大きく5つの地区にグルーピングされている。相生市街地を境にして東西に分かれ、東側は南部に位置する那波野地区と北部に位置する相生市側の光明山地区・龍野市側の揖西地区、西側は谷をはさんで北側の西後明地区、南側の入野地区に分けられている。

生産は5世紀末～6世紀初め（KM1号窯式）に那波野地区の那波野丸山3号窯に始まり、7世紀初め頃までは那波野地区で生産が続く。その後、奈良時代にかけては北側の光明山・揖西・西後明地区に移る。平安時代に入ると光明山・揖西地区での生産はほとんど見られなくなり、西後明地区から徐々に入野地区へ広がっている。既発見の窯跡のうち90基程度が平安時代に属し、最も盛んに生産が行われたと考えられる。平安時代の終わり頃になると那波野・光明山・揖西地区へ戻り、瓦当兼業窯が見られるようになる。その後、12世紀末頃の揖西地区（竹原窯跡群）でその生産を終える。

第3表 相生・龍野窯跡群調査一覧

遺跡名	調査主体	調査年度	文献
那波野地区			
那波野丸山1～4号窯	相生市教育委員会	1982年	松岡秀夫「那波野丸山窯跡」「兵庫県埋蔵文化財年報 昭和57年度」
光明山地区			
光明山3号窯	相生市教育委員会		光明山古窯跡発掘調査団「光明山古窯跡」1991年
構谷2・3号窯	相生市教育委員会	1982年	松岡秀夫「構谷2号窯跡」「兵庫県埋蔵文化財年報 昭和57年度」
西後明地区			
西後明28・29・31・33・34・36・37号窯	相生市教育委員会	1980年	西後明古窯跡発掘調査団「相生市若狭野東部土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財(西後明古窯跡群)発掘調査報告書」1984年
西後明19・41号窯	相生市教育委員会	1984年	西後明古窯跡発掘調査団「相生市若狭野東部土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財(西後明古窯跡群)発掘調査報告書」1984年
西後明18・20・22・23号窯	相生市教育委員会	1985年	西後明古窯跡発掘調査団「相生市西後明古窯跡群発掘調査報告書その2」1985年
西後明40号窯	兵庫県教育委員会		2002年度報告書刊行
入野地区			
入野1・2号窯	相生市教育委員会	1981年	緑ヶ丘窯跡発掘調査団「相生市入野窯跡発掘調査報告書」1981年
緑ヶ丘一の谷3～5号窯	相生市教育委員会	1966年	鈴木豊彦「兵庫県相生市緑ヶ丘窯址調査について」「相生市史資料編」第10集1966年
緑ヶ丘一の谷2号窯	相生市教育委員会	1983年	緑ヶ丘窯跡発掘調査団「緑ヶ丘一ノ谷2号窯跡発掘調査報告書」1984年
緑ヶ丘落ヶ谷4～7・8号窯	兵庫県教育委員会	1980年	兵庫県教育委員会「相生市・緑ヶ丘窯址群」1986年
緑ヶ丘落ヶ谷9～11号窯	兵庫県教育委員会	1981年	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「相生市・緑ヶ丘窯址群」1995年
那波乳母ヶ懐3号窯	兵庫県教育委員会	1998年	本書
那波乳母ヶ懐1号窯	兵庫県教育委員会	1981年	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「相生市・緑ヶ丘窯址群」1995年
揖西地区			
大津原1～4号窯	兵庫県教育委員会	1980年	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「大津原古窯址群」1995年
竹原7号窯	龍野市教育委員会	1994年	龍野市教育委員会「竹原遺跡」1999年



第5図 緑ヶ丘落矢ヶ谷支群分布図

### 第3節 緑ヶ丘落矢ヶ谷支群の分布

今回調査を行った落矢ヶ谷6号窯と乳母ヶ懐1号窯は、相生窯跡群のうち西南部に位置する入野地区に含まれる。入野地区的窯跡は西側から入野集落南側の丘陵部に位置する入野支群、緑ヶ丘団地西側の丘陵に位置する緑ヶ丘一の谷支群、緑ヶ丘団地東側の丘陵に位置する緑ヶ丘落矢ヶ谷支群に分けられている。

緑ヶ丘落矢ヶ谷支群は宮山から北西方向に派生した丘陵の谷部に立地し、谷毎に4つのグループに分けられている<sup>(3)</sup>。

- A群 北側の鶴龜方面に開析する主谷の開口部付近に位置する。相当数の窯跡が存在していたようであるが、住宅地造成により未調査のまま消滅し、実体については不明である。
- B群 A群の南側で、西側に開析する支谷に位置する。A群と同様、住宅地造成により谷北斜面を破壊されている。落矢ヶ谷1・2・5・7号窯が属し、山陽自動車道建設にともない落矢ヶ谷1・2・7号窯が調査されている。
- C群 最も南側で、西側に開析する支谷に位置する。乳母ヶ懐1～3号窯が属し、山陽自動車道建設にともない乳母ヶ懐3号窯が調査され、今回乳母ヶ懐1号窯の調査を行った。乳母ヶ懐4号窯については確認調査の結果その存在を確認することができなかった。
- D群 北側の童原方面に開析する谷に位置する。落矢ヶ谷3・4・6・8～11号窯が属し、山陽自動車道建設にともない落矢ヶ谷3・4・8～11号窯が調査され、今回落矢ヶ谷6号窯の調査を行った。

- (1) 森内秀造「兵庫県相生古窯跡群について」『日本史論叢』第10輯 1983年
- (2) 相生窯跡群については既に森内秀造氏の研究があり、龍野市城内の揖西地区については近年、岸本道昭氏・野村展右氏などによって新たに踏査が行われている。ここでは、それらについてごく簡単に紹介し、詳細はそれらの研究に依頼したい。
- 森内秀造「相生の古代窯業」『相生市史』第1巻 1984年
- 森内秀造「窯跡資料」『相生市史』第5巻 1989年
- 野村展右「相生・龍野古窯跡群について」『ひょうご考古』第7号 2001年
- (3) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『相生市・緑ヶ丘窯跡群II』1995年

## 第3章 調査の成果

### 第1節 緑ヶ丘落矢ヶ谷6号窯

#### 1. 造構

落矢ヶ谷支群 相生・龍野窯跡群の分布域の中でも中心付近に位置する支群で、15基の窯跡からなる。

落矢ヶ谷6号窯は、支群の中でも最も北側の谷の開口部近くに位置する。

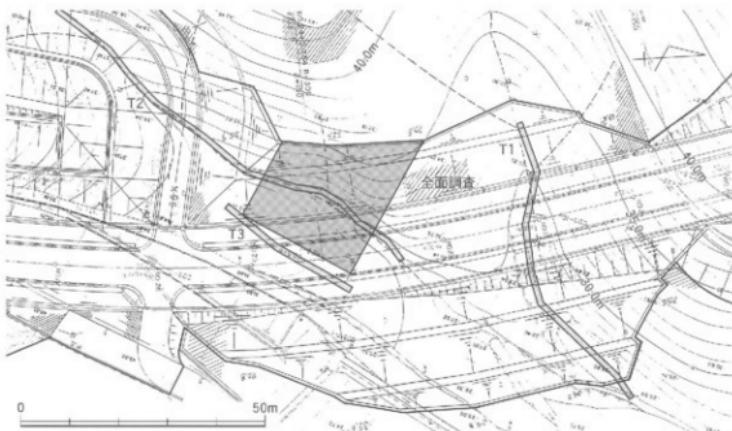
立地 北東に開口する谷地形の西側斜面に立地する。標高はおよそ30~37mである。調査区中央は、南西—北東方向の谷地形となっている。

検出状況 調査区西端で検出した。焼成室の大半と煙道部は調査区外である。焚口および前庭部は、流出により不明であるが、燃焼室と焼成室の遺存状況は比較的良好である。

構造 窯体の規模は、長軸方向で検出長3.1m、幅は燃焼室で1.0m、焼成室で約1.1mである。窯体主軸の方向は、N59°Wである。床面の傾斜角は燃焼室で約20°、焼成室で約24°を測り、両者の境は段をなす。窯体は最も残りの良いところで約30cm地山を掘り込んでいる。また、窯体の両側を、掘り下げたような地山整形痕は確認で



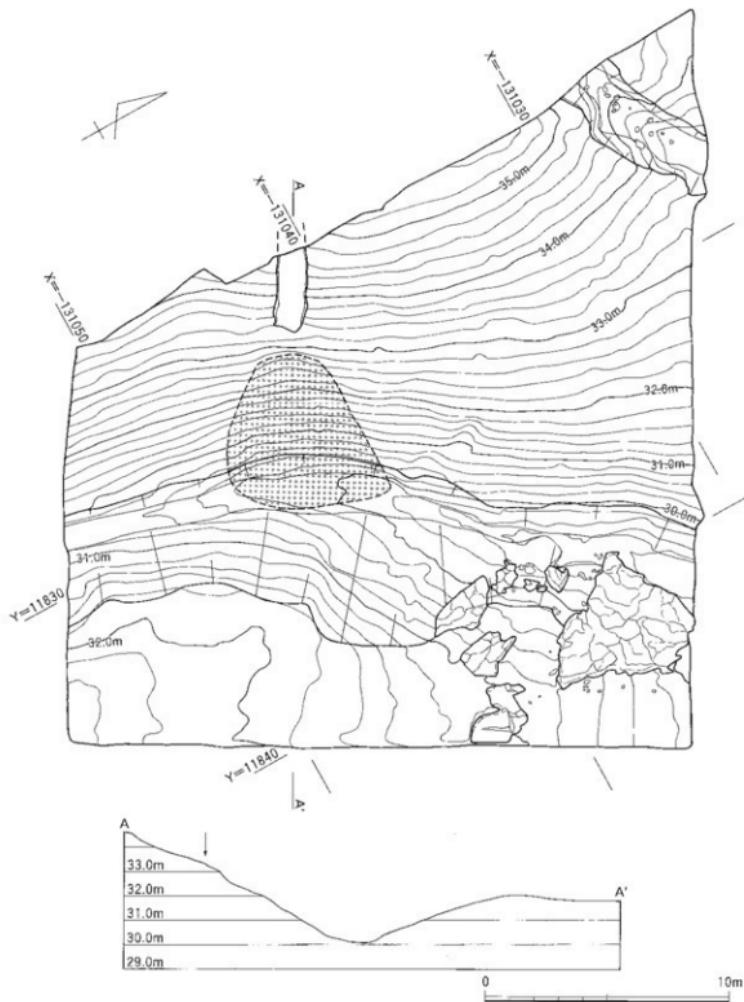
第6図 調査風景



第7図 落矢ヶ谷6号窯調査区位置図

きなかった。

側壁の残存高は、最大で約30cmである。側壁は床面からほぼ直角に立ち上がる。床面および側壁には5~10cm前後の厚さで粘土を貼り付けている。床面の燃焼度は比較的甘い。燃焼室で部分的に暗緑灰色に還元しているものの、窯体内のほとんどは黄褐色還元である。操業が短期間であった可能性が考えられる。

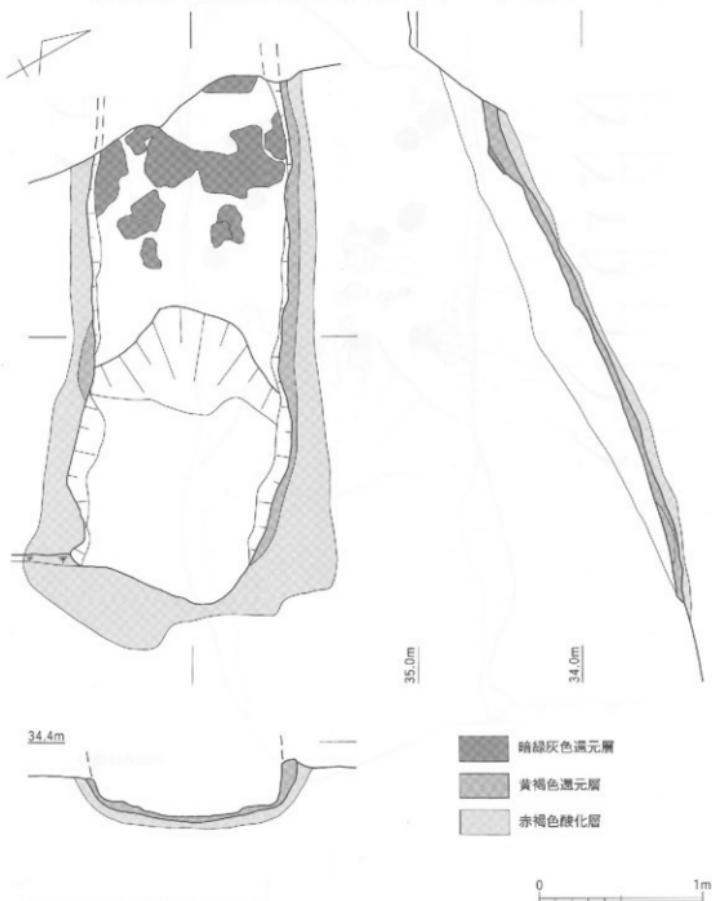


第8図 落矢ヶ谷6号窯地形測量図

窯体床面および側壁に貼り付けた粘土を除去すると燃焼室の床面下に杭跡が確認できた。杭跡は9基検出されたが、中でも燃焼室付近では、窯体の中軸線にほぼ線対称になるよう3対認められる。杭跡の直径は5cm前後、深さは約5cmで、炭化物で充満していた。

焼成室の大半と煙道部は未調査であるが、調査区外の地表面で深さ5~10cm前後の凹地が約5mにわたって認められることから、窯体の全長は8m前後に復元できる。

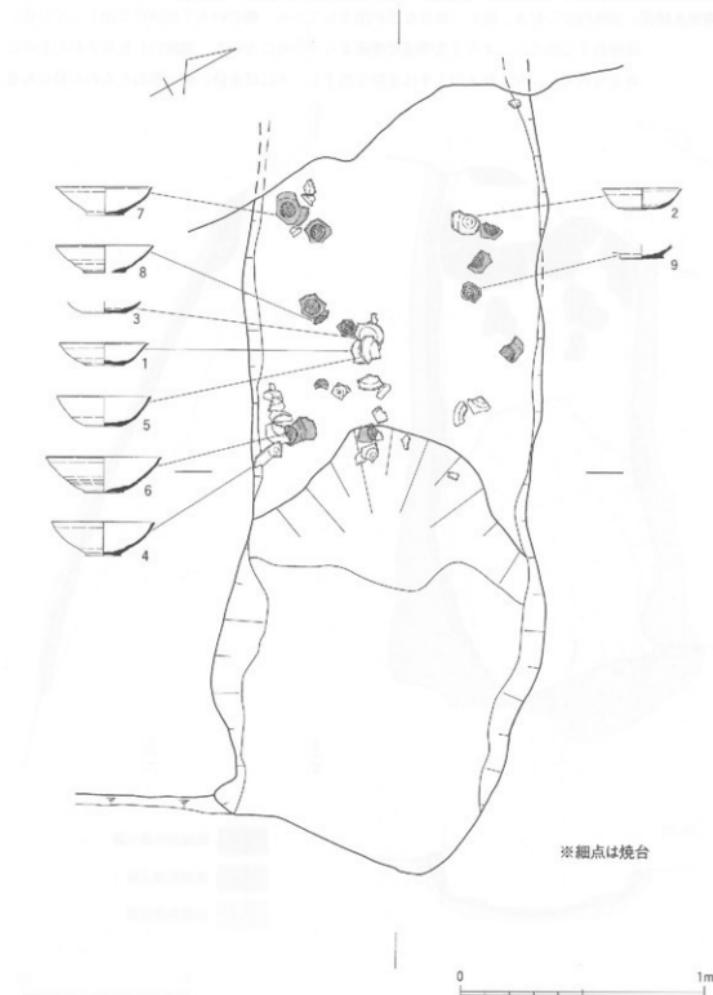
遺物出土状況 窯体内から杯A、椀C、皿Bなどが出土している。椀Cの大半は逆位で出土している。床面上で出土し、また2次焼成で焼締まっていることから、焼成台に転用されたものと考えられる。一方、杯Aの大半は正位で出土し、中には正位に積み重ねたものが見られる。



第9図 落矢ヶ谷6号窯窯体実測図

また、杯A、皿Cは焼成不良で黄褐色を呈する。土器は崩落した多量の窯壁片を除去した後に検出されることなどから、土器の焼成中に窯の天井部が崩落したものと考えられる。そして、窯は再建されることなく、放棄されたものと考えられる。

灰原 扇形に斜面下方に約6m×7mの範囲および調査区中央の谷部に広がる。厚さは斜面地で20~30cm、谷部で最大40cmを測る。灰原の堆積は、下層が主に褐灰色土層、上層が多量



第10図 落矢ヶ谷6号窯窯体内土器出土状況図

に炭が混じる黒色土層で、後者は特に多くの遺物および窯壁片を包含する。杯A、碗C 1、碗D 1、皿B、皿C、耳皿、壺B 1、壺C b、壺C c、壺A 3、鉢A a、鉢A b、甕が出土している。

### 小結

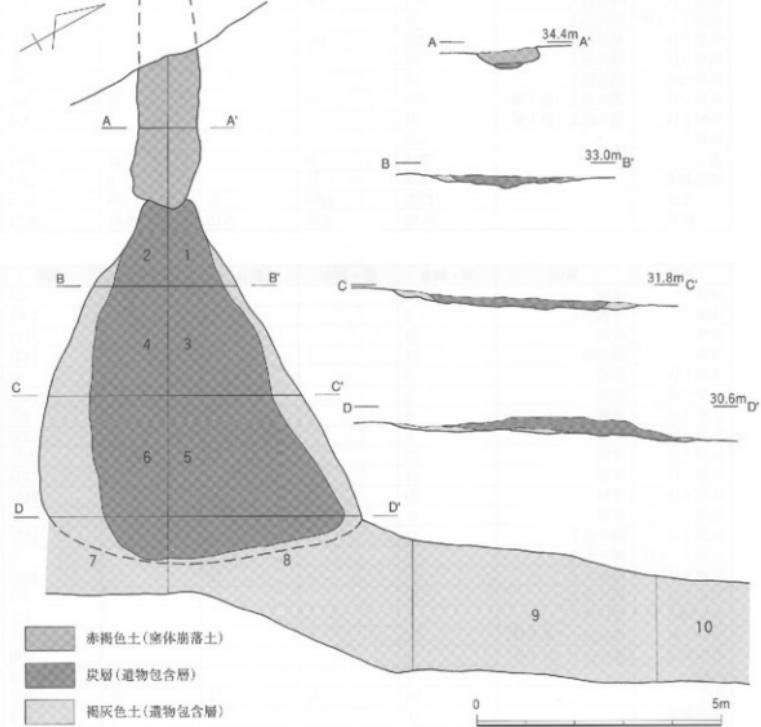
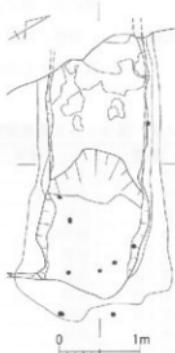
落矢ヶ谷6号窯は、焼成室の大半と煙道部が調査区外であるものの、燃焼室と焼成室の遺存状況は良好である。また、土器の出土状況から、焼成中の窯体の天井部崩落により、土器は焼成途中の状況で検出された可能性が考えられる。焼成中の一括資料は、焼成時の窯詰め状況や製品の組成を復元をする上で良好な資料となろう。

## 2. 遺物

### 出土器種

杯A、碗C 1、碗D 1、皿B、皿C、耳皿、壺B 1、

第11図 落矢ヶ谷6号窯  
窯体支柱痕検出位置図



第12図 落矢ヶ谷6号窯灰原地区割図

壺C b、壺C c、壺A 3、鉢A a、鉢A b、甕が出土している（器形分類は第4章参照）。

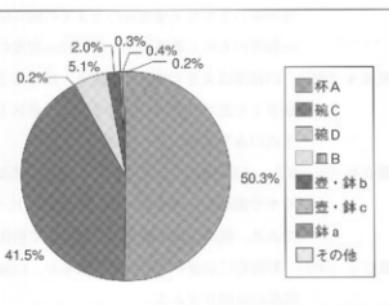
**出土数量** 窯体・灰原・表土より出土した遺物の総数は931個体（底部度数22333）である。窯体付近で出土したのは211個体であるが、窯体内に残っていたのは焼成部で63個体（床面・赤

第4表 落矢ヶ谷6号窯個体度数一覧表

遺構	層位	杯A	碗C	碗D	皿B	碗C・皿B底部
窯体	床面	210	110			186
窯体	赤褐色土	514	140		24	323
窯体	炭層	1475	37	13		554
窯体	輸出時	693	72			644
灰原1区	炭層	43				7
灰原2区	炭層	90				24
灰原3区	炭層	139				122
灰原4区	炭層	206				50
灰原5区	炭層	1317	406	19	36	1080
灰原6区	炭層	359	108	3	24	234
灰原8区	炭層	1058	259		17	1015
灰原	炭層	6				17
灰原7・8区	褐灰色土	377	125			610
灰原7・8区	褐灰色土	0				5
灰原8区	褐灰色土	526	107			295
灰原9区	褐灰色土	94			5	139
灰原10区	褐灰色土	56				69
灰原7区	褐灰色土(最下層)	524	44		24	305
灰原8区	褐灰色土(最下層)	91				138
灰原		122				52
表土		3101	39		47	2591
確認調査		238	15		3	303
合計		11239	1463	35	180	8763
比率		50.32	6.55	0.16	0.81	39.24

遺構	層位	壺・鉢b	壺・鉢c	鉢a	その他	合計
窯体	床面	2				508
窯体	赤褐色土	0				1001
窯体	炭層	39				2118
窯体	輸出時	21	1	4		1435
灰原1区	炭層	0				50
灰原2区	炭層	2				116
灰原3区	炭層	0		2		263
灰原4区	炭層	0				256
灰原5区	炭層	75		12		2945
灰原6区	炭層	11				739
灰原8区	炭層	80	26	26		2481
灰原	炭層	0				23
灰原7区	褐灰色土	42		16		1171
灰原7・8区	褐灰色土	0				5
灰原8区	褐灰色土	31	4	18	24	1005
灰原9区	褐灰色土	17				253
灰原10区	褐灰色土	0				125
灰原7区	褐灰色土(最下層)	24	6			927
灰原8区	褐灰色土(最下層)	1				230
灰原		0				174
表土		91	26	21	31	5947
確認調査		0				559
合計		436	63	99	55	22333
比率		1.95	0.28	0.44	0.25	

褐色)、燃焼部で88個体(炭層)出土していると考えられる。灰原では449個体が出土している。窯体付近の約2倍程度であり、さほど多い量とは言えないだろう。灰原のなかでは灰原5区炭層、灰原8区炭層、灰原7区褐色土、灰原8区褐色土での出土量が多く、谷を埋めながら遺物が堆積している状況がよく分かる。



第13図 落矢ヶ谷 6号窯の器種構成

器形別に見ると、杯Aが多く50%を占めている。次いで碗Cが42%を占め、碗Bが5%である。残る2%が壺・鉢類である。壺・鉢類のみの割合を示すと壺・鉢bが73%、壺・鉢c(壺D)が11%、壺・鉢a(鉢A a)が17%である。壺・鉢bには壺B b、壺C b、鉢A bが含まれるが、なかでも壺B bの底部と考えられる大型のものが多くを占めていることから、おむね壺Bが60%、壺Cが10%、壺Dが10%、鉢Aが20%程度と推測される。このように基本的には供器具を中心として生産され、供器具以外では壺Bが非常にめだっている。

杯A (2・3・10~12・18・19・22・25~38・66・67) 口径13cm~16cm、器高3.5cm~4.0cmのものが大半である。器高が4.5cmと高いもの(22)や、3.0cm前後と低いもの(19・33・38)が存在する。口縁部は外側のナデを強く施して外反させたものが多く認められる。底部はヘラ切り不調整である。

碗C 1 (4~9・13~16・20・23・24・38~60・68~76・80) 口径14cm~17cm、器高4.5cm~6.0cmのものが標準的な大きさで、口径17cm~20cm、器高が6.0cm~7.0cmと大きいものがある。平高台と体部の境はヘラ状工具によるナデによりはっきりしたものが多い。底部は回転糸切りりである。

碗C 1 (21・61) 底部は糸切りで、輪高台は貼り付けである。突帯の断面は3角である。

皿B 1 (17・62~65・77・82) 体部が内湾気味に開くもの(17・64・65)と直線的に開くもの(62・63・77)がある。碗C 1と同じく、平高台と体部の境はヘラ状工具によるナデによりはっきりしている。底部は回転糸切りである。

皿C (81) 比較的しつかりした高台をもつ。底部は回転糸切りである。見込み部分には仕上げナデが施されている。出土したのはこの1点のみである。

耳皿 (78) 底部は糸切りである。出土したのはこの1点のみである。

壺B 1 (83~90・94・95・97) 口縁部は大きく外反して開き、端部は上につまみ上げられている。体部は倒卵形で、体部外面に長方形の格子タキ痕を残すもの(85・88・95)、体部内面に無文当具痕を残すもの(83)がある。底部は粘土塊を円盤状にして形作っている。突帯は肩部に2条巡らされ、断面は台形である。耳は通常、平面Y字状の形状で、上部突帯の上に接した位置から下部突帯に被せるように貼り付けられている。83の耳は棒状のものが上

部突帯の上から下部突帯の上までの間に貼り付けられている。大きさは器高40cm・底径15cm程度のものと器高30cm・底径10cm程度の大小2つに分けることができる。

**壺B 4 (96)** 口縁部は大きく外反して開き、端部は上につまみ上げられている。体部はややいびつで、壺B 1と比べて肩部が張っている。壺B 1と同様なY字状の耳をもつ。出土したのはこの1点のみである。

**壺C b (91~93)** 口縁部は大きく外反して開き、端部は上につまみ上げられている。体部は倒卵形からやや胴の張ったものがあり、壺Bに比べて器高25~20cm程度と低く、寸詰まった形態である。底部は粘土塊を円盤状にして形作っている。93は肩部にヘラ描きをもつ。

**壺C c (98)** 形態的には壺C bと同様であるが、口縁端部のつまみ上げはやや不明瞭になっている。底部は糸切りである。

**壺D (99~102・105)** 体部の形態は本来の下膨れのものよりも胴張り・倒卵形に近くなっているようである。口縁部は大きく外反して開き、端部は尖り気味となる。99の口縁部は粘土紐の巻き上げ痕が非常に明瞭である。底部は糸切りである。102は把手で2本の紐を結び合わせている。落矢ヶ谷4号窯に類例がある。

**壺A 3 (103・104)** 口縁部は短く外反し、胴部はあまり膨らまない。

**鉢A (106~114)** 口縁部をくの字に折って外反させ、端部に面をもつ。器高12cm程度のものが多いが、器高15cmのもの(108)がある。片口がつくもの(108)と片口がつかないもの(109)がある。底部は輪高台をもつもの(鉢A a)、円盤作り平高台のもの(鉢A b)がある。111は他のものとは異なり、器壁が薄く、端部に面をもたない。

**甕 (115・116)** 体部の破片がわずかに出上るのみである。外面には長方形の格子タタキ痕を残し、内面は無文當て具痕の後ナデである。

## 第2節 那波乳母ヶ懐1号窯

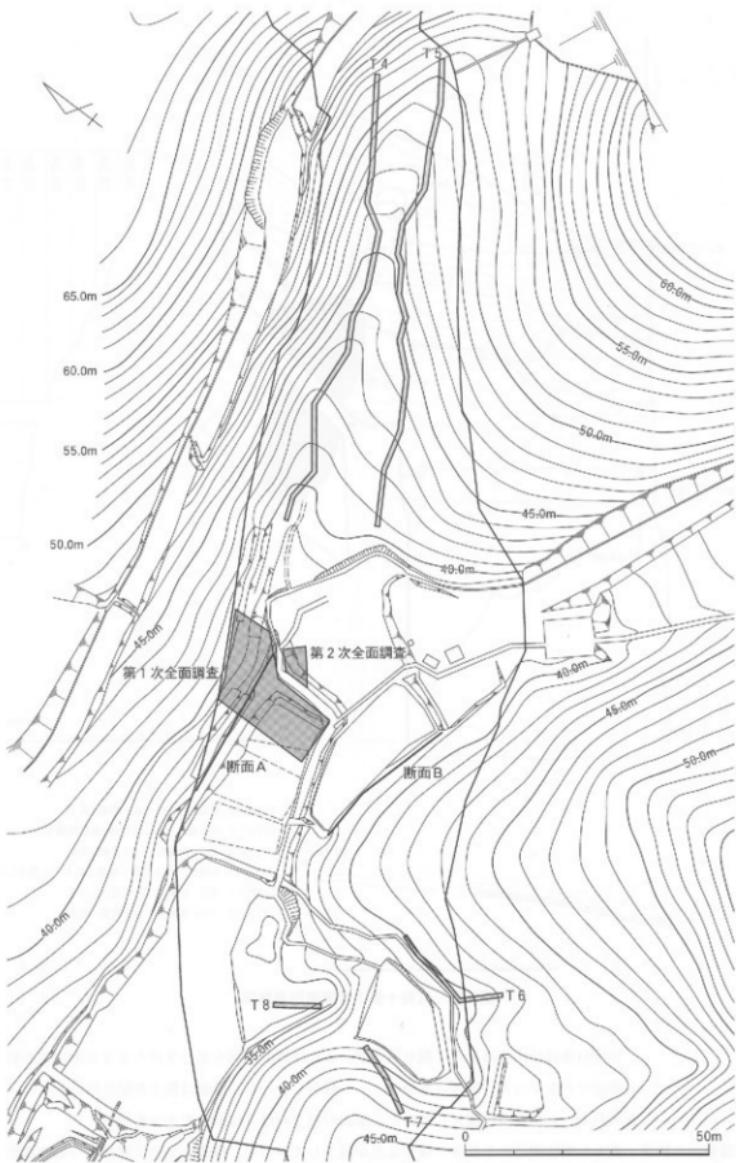
### 1. 遺構

**落矢ヶ谷支群** 相生窯跡群の分布域の中で最も南側に位置する支群(C群)で、4基の窯跡からなる。乳母ヶ懐1号窯は、支群の中では谷の開口部近くに位置する。

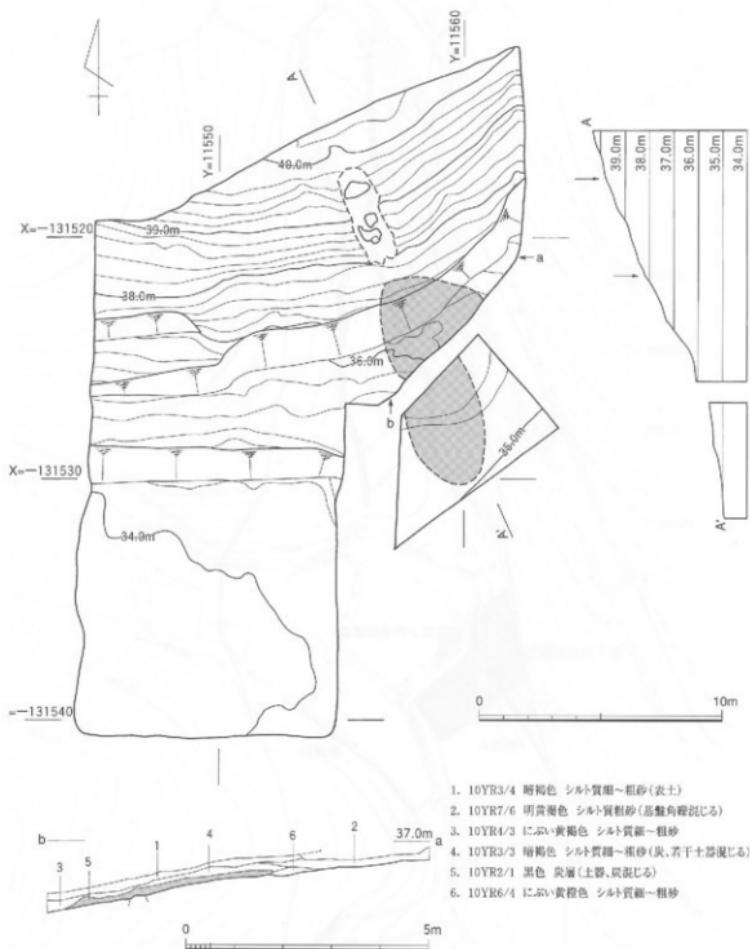
**立地** 南西に開口する谷地形の北側斜面に立地する。標高はおよそ35~39mである。調査範囲は、調査前まで等高線に平行な細長い棚田であったことから、北から南へ階段状に下がる3枚の平坦面からなる。

**検出状況** 後世の開墾による削平のため、遺存状況は非常に悪い。表土直下で窯床面が検出された。検出した窯体は、床面が一部残存するのみで、窯体の前庭部、焚口および焼成室は、里道により破壊されている。煙道部についても削平により不明である。

**構造** 床面しか残存せず、窯体の構造は判然としない。床面の残存する範囲は、長軸方向で約3.1m、その直交方向で最大約1.1mである。ただし、床面自体は残存しないが、残存する床面の周囲に約4.1m×約1.4mの範囲で被熱による赤化面が認められることから、窯体は少なくとも4m以上あったものと推定される。窯体主軸の方向はN26°Wである。残存する床面の傾斜角は約19°である。



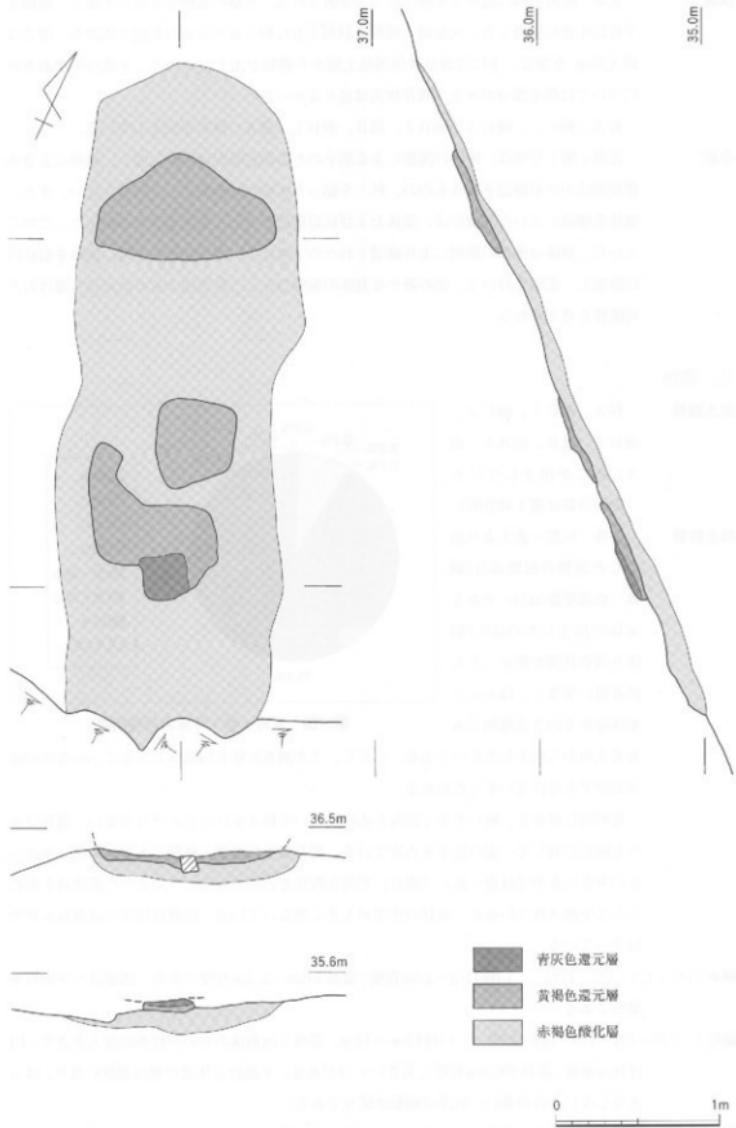
第14図 乳母ヶ懐 1号窯調査区位置図



第15図 乳母ヶ懐1号窯地形測量図

窯体自体は地山をほとんど掘りこまず、また窯体の両側を掘り下げたような地山整形痕も確認できなかった。床面は部分的にしか残存しないが、床面は粘土を貼り付けたもので青灰色ないし黄褐色に還元していた。床面の粘土の厚さは最大で8cmを測る。

**遺物出土状況** 表上と窯体周辺から杯A、椀Cなどが出土しているが、床面上で原位置を保つ遺物は出土していない。



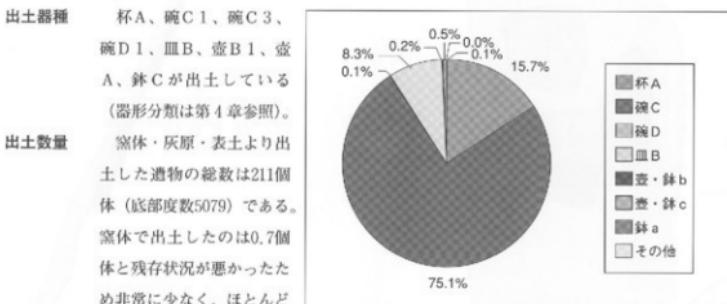
第16図 乳母ヶ懐1号窯窯体実測図

**灰原** 北東—南西方向に流れる水路によって分断される。水路の北側を平成11年度に、南側を平成12年度に調査した。灰原は、扇形に斜面下方に約5m×9mの範囲に広がる。厚さは最大30cmを測る。主に炭泥じり黒褐色土層から遺物が出上している。平成12年度調査地については削平部分が大きく残存状況は良くなかった。

杯A、碗C1、碗C3、碗D1、皿B、壺B1、壺A、鉢Cが出土している。

**小結** 乳母ヶ懐1号窯は、後世の開墾による削平のため遺存状況は非常に悪く、被熱による赤化面の広がりが確認されるものの、粘土を貼った床面は部分的にしか残存しない。また、窯体を構成していた窯壁片は、窯体および灰原周辺でほとんど確認されなかった。このことから、窯体は後世の開墾により破壊されたのではなく、窯の操業終了後、窯体を徹底的に破壊し、窯壁を碎いて、別の新たな窯体の窯壁材として再利用するために持ち運ばれた可能性も考えられる。

## 2. 遺物



第17図 乳母ヶ懐1号窯の器種構成

表土中から出土したものである。ただし、2次調査灰原も18個体と少なく、かなりの部分が削平を受けていると思われる。

器形別に見ると、碗Cが多く75%を占め、次いで杯Aが16%とかなり少ない。皿Bは8%と碗Cに対して一定の比率を占めている。残る約1%が壺・鉢類であり、非常に少ない。その少ないなかでは壺・鉢c（壺D）が50%程度を占めている。このように供膳具を中心として生産されているが、碗杯の比率が大きく異なっている。供膳具以外では壺Dがやや目立っている。

杯A (117・124・127・128) 口径11cm～12cm程度、器高3.0cm～3.5cm程度である。底部はヘラ切り不調整である。

碗C1 (118～121・125・129～133) 口径13cm～14cm、器高5cm前後のものが標準的な大きさで、口径16cm前後、器高が6.0cm程度と大きいものがある。平高台と体部の境は強状になり、はっきりしないものが多い。底部は回転糸切りである。

碗C3 (122・126・134～136) 体部は碗C1と比べて直線的に開く。平高台と体部の境ははっきりしないものが多いが、見込みが凹んでいるため高台は高く見える。底部は回転糸切りである。

第5表 乳母ヶ懐1号窯個体数一覧表

造構	層位	杯A	碗C	碗D	皿B	碗C・皿B底部
窯体	検出時	5				12
灰原	炭層	17	73			400
灰原	黒褐色土	76	63			278
灰原		270	40		24	1496
2次調査灰原		61		7		358
表土		363	41			1386
確認調査	確認	3				64
合計		795	217	7	24	3994
比率		15.65	4.27	0.14	0.47	78.64

造構	層位	壺・鉢b	壺・鉢c	壺・鉢a	その他	合計
窯体	検出時					17
灰原	炭層					490
灰原	黒褐色土					417
灰原			19			1849
2次調査灰原						426
表土		11	5		7	1813
確認調査	確認					67
合計		11	24	0	7	5079
比率		0.22	0.47	0.00	0.14	

法量の分かるものは1点のみで、口径14.7cm、器高6.15cmである。

碗D 1 (123・140・141) 底部は糸切りである。輪高台は貼り付けで、断面は3角形である。突帯の断面も3角形である。

皿B (138) 口径は10.7cmと小さく、やや深みをもち、見込みがやや凹み気味である。底部は糸切りである。

杯B (139) 底部はヘラ切りである。混入と思われる。

壺B 1 (142・143) 突帯は肩部に2条巡らされ、断面は角のとれた台形もしくは三角形になっている。耳は平面Y字状の形状で、上部突帯の上に接した位置から下部突帯に被せるように貼り付けられている。底部は粘土塊を円盤状にして形作っている。

壺D (144) 底部は糸切りである。

壺A (145) 口縁部は短く上方に立ち上がり、脛部は球状に膨らむ。

鉢C (146) 口縁部は内湾し、端部は丸味をもつ。口縁部内面には明瞭な粘土紐接合痕が残っている。

第6表 遺物一覧表(1)

番号	形	遺物名	地区・層位	口径	高さ	底径	その他の法量	調整および備考
1	杯A	落矢ヶ谷6号窓	窓体土器22	14.5	3.7	6.65	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
2	杯A	落矢ヶ谷7号窓	窓体上部2	(12.8)	3.4	7.4	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
3	杯A	落矢ヶ谷6号窓	窓体土器23			7.0	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
4	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	窓体土器33	(16.8)	5.6	5.8	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
5	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	窓体土器21	15.45	4.9	6.1	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
6	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	窓体土器36	(18.6)	5.8	6.6	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
7	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	窓体土器34(縦台)	15.6	4.7	6.0	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
8	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	窓体上部2(縦台)	15.8	4.5	6.3	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
9	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	窓体Ⅱ区赤褐色土			7.2	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
10	杯A	落矢ヶ谷6号窓	窓体Ⅱ区赤褐色土	(13.8)	2.9	6.7	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
11	杯A	落矢ヶ谷7号窓	窓体Ⅱ区赤褐色土	(13.5)	3.4	7.1	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
12	杯A	落矢ヶ谷7号窓	窓体Ⅱ区赤褐色土	13.2	2.9	6.8	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
13	碗C1	落矢ヶ谷7号窓	窓体Ⅱ区赤褐色土	15.0	4.9	6.8	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
14	碗C1	落矢ヶ谷7号窓	窓体Ⅱ区赤褐色土	15.5	5.4	5.4	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
15	碗C1	落矢ヶ谷7号窓	窓体Ⅱ区赤褐色土	15.5	5.0	5.6	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
16	碗C1	落矢ヶ谷7号窓	窓体Ⅱ区赤褐色土			7.0	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
17	盤B	落矢ヶ谷6号窓	窓体Ⅱ区赤褐色土	14.1	2.2	5.1	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
18	杯A	落矢ヶ谷6号窓	窓体灰	13.2	3.6	5.7	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
19	杯A	落矢ヶ谷7号窓	窓体灰	13.3	3.0	8.1	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
20	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	窓体灰	15.8	6.0	5.9	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
21	碗D	落矢ヶ谷6号窓	窓体灰			6.35	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
22	杯A	落矢ヶ谷6号窓	窓体	12.5	4.5	7.6	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
23	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	窓体	17.2	5.7	6.2	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
24	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	窓体	13.8	4.8	5.4	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
25	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	15.7	3.8	8.4	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
26	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	15.0	3.7	8.5	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
27	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	16.0	3.7	8.4	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
28	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	14.3	4.0	6.5	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
29	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	13.8	3.5	6.2	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
30	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	14.1	3.6	6.8	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
31	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	13.8	3.7	8.1	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
32	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	13.8	3.8	8.0	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
33	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	13.8	3.0	6.6	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
34	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	(13.9)	4.2	7.2	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
35	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	(13.8)	2.8	7.6	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
36	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	13.6	3.7	7.3	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
37	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	(13.4)	3.4	7.5	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
38	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原3区灰層	13.2	3.1	7.45	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面はヘラ切り	
39	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原5区灰層	19.2	6.8	7.3	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
40	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原5区灰層	17.4	8.0	7.0	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面は回転系切り	
41	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原5区灰層	17.2	6.2	6.5	内面・体部外面は回転ナメ、底部外面是回転系切り	
42	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原5区灰層	16.8	5.6	7.4	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
43	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原5区灰層	16.5	5.3	7.0	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
44	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原5区灰層	16.2	5.5	7.6	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
45	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原5区灰層	16.0	5.4	6.0	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
46	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原5区灰層	15.4	5.6	5.6	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
47	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原6区灰層	15.6	5.2	6.9	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
48	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原5区灰層	15.65	5.3	5.8	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
49	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原6区灰層	15.3	5.7	6.7	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
50	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	15.4	4.9	6.2	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
51	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	15.2	5.0	6.15	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
52	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	14.75	5.7	7.0	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
53	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	14.5	4.9	5.6	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
54	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	14.4	5.8	6.1	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
55	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	14.0	5.3	5.8	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
56	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	14.1	6.0	5.7	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
57	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	13.8	4.8	6.5	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
58	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	14.1	5.7	5.8	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
59	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	14.0	5.3	6.0	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
60	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	12.7	5.1	5.4	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
61	碗D1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層			6.6	底部面は回転ナメ、腹部外面は回転系切り	
62	皿B	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	13.6	2.7	5.4	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
63	皿B	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	14.5	3.0	6.6	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
64	皿B	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	13.7	3.1	6.0	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
65	皿B	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	14.0	2.8	5.6	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
66	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	13.9	3.6	7.8	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是ヘラ切り	
67	杯A	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	13.6	3.9	8.0	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是ヘラ切り	
68	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	19.7	6.5	7.3	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	
69	碗C1	落矢ヶ谷6号窓	灰原8区灰層	18.8	6.7	7.55	内面・体部外面是回転ナメ、底部外面是回転系切り	

第7表 遺物一覧表(2)

番号	器形	遺構名	地区・層位	口径	器高	底径	その他の法量	調整および備考
70	碗 C	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区掘灰土.	18.0	6.6	7.0		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
71	碗 C	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 7 区掘灰土(削下)		(7.1)			内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
72	碗 C	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 7 区掘灰土(削下)	16.0	5.1	7.0		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
73	碗 C	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 7 区掘灰土	16.1	5.0	6.8		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
74	碗 C	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 7 区掘灰土	15.8	5.3	6.8		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
75	碗 C	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 7 区掘灰土	15.5	5.4	6.5		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
76	碗 C	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 8 区掘灰土	15.4	4.7	6.5		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
77	皿 B	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 8 区掘灰土(削下)	14.5	2.4	6.6		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
78	耳皿	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰土上			4.45		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り、之方に縫により折り掛け
79	杯 A	落矢ヶ谷 6 号窯	疊詰 T 2					重ね焼き
80	碗 C	落矢ヶ谷 6 号窯	表上	15.2	5.7	6.2		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
81	皿 C	落矢ヶ谷 6 号窯	表上			7.3		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
82	皿 B	落矢ヶ谷 6 号窯	表上	15.0	2.4	6.8		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
83	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	窓体灰層	15.0			腹径24.55	14号部内外面は回転ナデ、体部外面は当て具痕後回転ナデ、体部外面は回転板ナデ
84	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	窓体			15.0	腹径24.75	体部内外面は回転ナデ、体部外面には部分的にタキ印を残す、底部は不調整
85	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	窓体			11.8	腹径20.3	体部外面はタキ印後回転ナデ、体部内面は回転ナデ、底部は不調整
86	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	窓体			11.15		体部外表面は回転ナデ、底部は不調整
87	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層	16.5			腹径25.4	内外面とも回転ナデ
88	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層	15.3	19.56	10.32	腹径19.56	1号部内外面は回転ナデ、体部外面はタキ印後回転ナデ、体部内面は回転ナデ、底部外面は不調整
89	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層			14.2		体部内外面は回転ナデ、底部は不調整
90	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層	16.1			腹径23.6	内外面とも回転ナデ
91	壺 C	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層	10.8	23.6	11.7	腹径17.0	体部内面・体部外面上半は回転ナデ、体部外下面下半は回転板ナデ
92	壺 C	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区灰層	(10.8)	(19.6)	8.7	腹径14.7	体部内外面は回転ナデ、底部は不調整
93	壺 C	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区灰層			10.3	腹径16.45	体部内外面は回転ナデ、底部外面は不調整、肩部にハラ描きあり
94	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 7 区掘灰土			15.0	腹径23.9	体部内外面は回転ナデ、底部外面は不調整
95	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 7 区掘灰土				腹径20.6	体部外側はタキ印後回転ナデ、体部内面は回転ナデ
96	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区掘灰土	12.3			腹径18.3	体部内面・体部外面上半は回転ナデ、体部内下面下半は回転板ナデ
97	壺 B	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 7 区削下			13.2		体部内外面は回転ナデ、底部は不調整
98	壺 C	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層	10.1	18.95	9.55	腹径16.3	体部内面・体部外面上半は回転ナデ、底部内面は不調整、底部外面は辺止糸切り
99	壺 D	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層			9.15		内外面とも回転ナデ、口縁部内面には粘土巻き上げ痕が確認に残る
100	壺 D	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層			8.7		内外面とも回転ナデ
101	壺 D	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区灰層				7.3	体部内外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
102	把手	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層					手づくね
103	壺 A	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区灰層	13.1			腹径18.95	内外面とも回転ナデ
104	壺 A	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区灰層	9.2				内外面とも回転ナデ
105	壺	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区灰層			11.4		内面・体部外側は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
106	鉢 A	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区灰層	(18.2)				内外面とも回転ナデ、体部内面に指痕あり
107	鉢 A	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層	14.9	11.2	10.4	腹径15.9	内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転ナデ?
108	鉢 A	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区灰層	19.6	15.35	12.5	腹径21.4	内面・体部外面上半は回転ナデ、底部外面は不調整・縫合の跡みハラナデ、片口あり
109	鉢 A	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 3 区灰層	18.3	12.2	9.4	腹径17.1	体部内面・体部外面上半は回転ナデ、体部外下面下半は回転ナデ、底部内面はナデ、片口なし
110	鉢 A	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区灰層	16.3	12.25	9.4	腹径16.5	体部内面・体部外面上半は回転ナデ、体部外下面下半は回転板ナデ、底部外面はナデ
111	鉢 A	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 8 区灰層				腹径16.5	外縁に回転ナデ、底部外面も回転ナデ
112	鉢 A	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 7 区掘灰土	(18.3)				内外面とも回転ナデ
113	鉢 A	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 7 区掘灰土	18.0	11.8	9.5	腹径19.7	体部内面・体部外面上半は回転ナデ、底部外面はナデ
114	鉢 A	落矢ヶ谷 6 号窯	延喜 7 区掘灰土	21.0	12.8	9.8	腹径21.7	体部内面・体部外面上半は回転ナデ、底部外面はナデ
115	甕	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区灰層					外縁タキ印、内面當て具痕後ナデ
116	甕	落矢ヶ谷 6 号窯	灰原 5 区掘灰土					外縁タキ印、内面當て具痕後ナデ
117	杯 A	乳母ヶ瀬 1 号窯	灰原灰層	(11.2)	3.1	(5.5)		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り
118	碗 C	乳母ヶ瀬 1 号窯	灰原灰層	15.8	6.1	6.0		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
119	碗 C	乳母ヶ瀬 1 号窯	灰原灰層	13.8	5.2	6.4		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
120	碗 C	乳母ヶ瀬 1 号窯	灰原灰層	13.6	4.94	5.76		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
121	碗 C	乳母ヶ瀬 1 号窯	灰原灰層			6.7		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
122	碗 C	乳母ヶ瀬 1 号窯	延喜灰層			6.95		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
123	碗 D	乳母ヶ瀬 1 号窯	延喜灰層	(15.6)				内面・体部外面は回転ナデ
124	林 A	乳母ヶ瀬 1 号窯	延喜灰層	(11.8)	3.6	(6.1)		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り
125	碗 C	乳母ヶ瀬 1 号窯	延喜灰層	13.8	5.1	5.85		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
126	碗 C	乳母ヶ瀬 1 号窯	延喜灰層	14.7	6.15	7.2		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
127	杯 A	乳母ヶ瀬 1 号窯	灰原表上	12.2	3.4	5.8		内面・体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り

第8表 遺物一覧表(3)

番号	器形	遺物名	地区・層位	口径	器高	底径	その他の法量	調査および備考
128	杯A	乳母ヶ懐1号窓	灰原表土	11.0	3.1	5.8		内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁はヘラ切り
129	碗C 1	乳母ヶ懐1号窓	灰原表土上	(16.15)	6.13	7.1		内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁は回転ヘタ切り
130	碗C 1	乳母ヶ懐1号窓	灰原表土上	13.9	5.21	6.03		内面-体部外壁は回転ナデ
131	碗C 1	乳母ヶ懐1号窓	灰原表土	13.1	4.75	5.35		内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁は回転ヘタ切り
132	碗C 1	乳母ヶ懐1号窓	灰原表土	12.9	5.05	5.8		内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁は回転ヘタ切り
133	碗C 1	乳母ヶ懐1号窓	灰原表土	13.3	5.2	6.4		内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁は回転ヘタ切り
134	碗C 3	乳母ヶ懐1号窓	灰原表土			6.5		内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁は回転ヘタ切り
135	碗C 3	乳母ヶ懐1号窓	灰原表土			9.2		内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁は回転ヘタ切り
136	碗C 3	乳母ヶ懐1号窓	灰原周辺			6.3		内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁は回転ヘタ切り
137	碗D 1	乳母ヶ懐1号窓	灰原周辺	(13.8)				内面とも回転ナデ
138	皿B	乳母ヶ懐1号窓	灰原	10.7	2.8	4.9		内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁は回転ヘタ切り
139	杯D	乳母ヶ懐1号窓	表土			10.1		底部内面は回転ナデ、底部外壁は回転ヘラ切り
140	碗D 1	乳母ヶ懐1号窓	灰層(下層)					内面とも回転ナデ
141	碗D	乳母ヶ懐1号窓	灰層(下層)			7.9		底部内面は回転ナデ、底部外壁は回転ナデ
142	皿B 1	乳母ヶ懐1号窓	灰原表土					内面とも回転ナデ
143	壺	乳母ヶ懐1号窓	灰原表土		13.95			内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁は不調整
144	壺	乳母ヶ懐1号窓	灰層(下層)			9.0		内面-体部外壁は回転ナデ、底部外壁は回転ヘタ切り
145	壺A	乳母ヶ懐1号窓	灰原周辺	10.6				内面とも回転ナデ
146	鉢C	乳母ヶ懐1号窓	灰原周辺	(18.8)				内面とも回転ナデ

## 第4章 調査の成果

### 第1節 遺物について

#### 1. はじめに

緑ヶ丘窯跡群を含む相生・龍野窯跡群についてはこれまでに少なからず調査が行われ、それに基づき、相生・龍野窯跡群については森内秀造氏によって幾度か検討が行われている<sup>(1)</sup>。また、その他に岸本道昭氏が消費地遺跡との対比<sup>(2)</sup>、野村辰右氏が新たな表探資料などをもとに検討を加えている<sup>(3)</sup>。

ここではそれらの研究成果を参考にしながら緑ヶ丘6号窯と乳母ヶ懐1号窯の位置づけをおこなう。

#### 2. 器形分類

杯A 無高台の杯。底部はヘラ切りである。

杯B 輪高台をもつ杯。

杯B蓋 杯Bの蓋。

碗A ヘラ切り後、輪高台付けた碗。杯Bに比べて体部に丸味をもつ。

碗B ヘラ切り平高台をもつ碗。

碗C 糸切り平高台をもつ碗。

碗C 1 通常の碗。

碗C 2 体部に沈線または段をもつ

碗C 3 底部内面に段をもつ

碗D 糸切り切り後、輪高台付けた碗。

碗D 1 体部に突帯をもつ

碗D 2 体部に突帯をもたない

小碗 口径10cm以下の小型の碗である。

皿A 底部がヘラ切りの皿。器高の低い浅皿形態のものと杯Aの器高をやや低くした形態のものがある。

皿B 糸切り平高台をもつ皿。

皿C 輪高台をもつ皿。

小皿 口径10cm以下の小型の皿である。底部は糸切りである。

耳皿 小型の皿Cの口縁部の2方を折り曲げたもの。

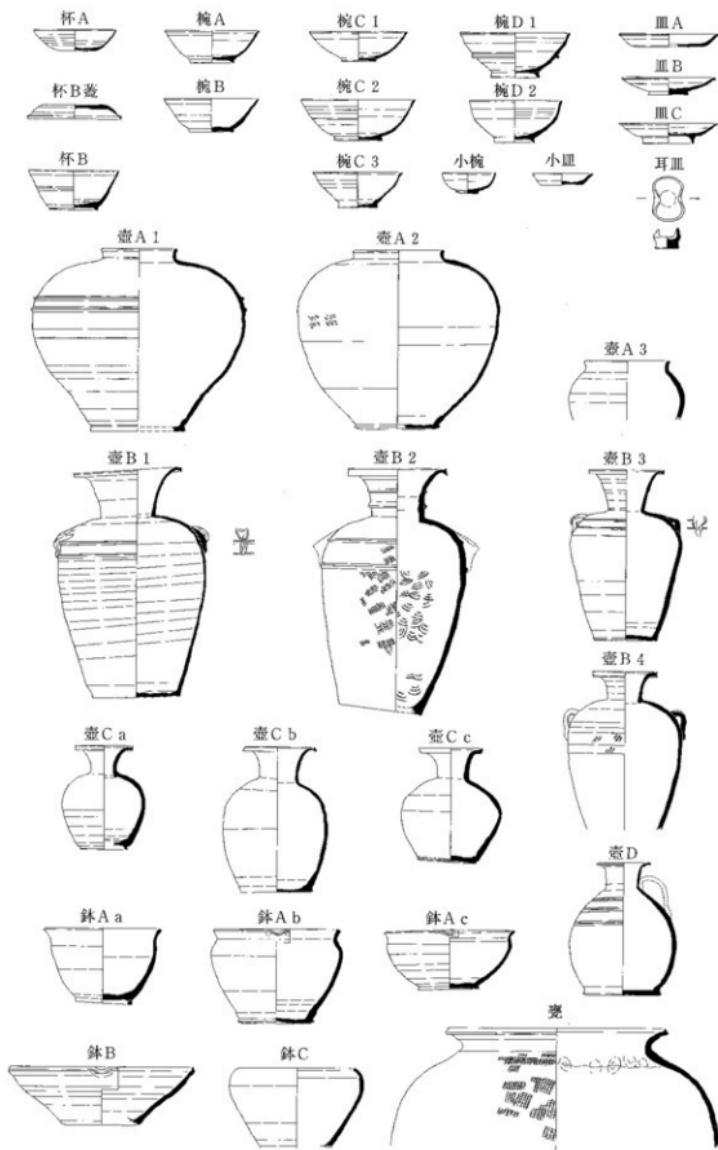
壺A 短頸壺。

壺A 1 胎部に突帯をもつ。

壺A 2 突帯をもたない。体部は球形に膨らむ。

壺A 3 突帯をもたない。体部はあまり膨らまない。

壺B 双耳壺。



第18図 器形分類図

壺B 1 肩部に突帯をもつ。  
 壺B 2 肩部と頸部に突帯をもつ。  
 壺B 3 肩部に沈線をもつ。  
 壺B 4 突帯や沈線をもたない。

壺C 広口壺。

壺C 1 底部に輪高台をもつ。  
 壺C 2 底部が円盤作りである。  
 壺C 3 底部が糸切りである。

壺D 手付瓶。

鉢A 口縁部を「く」の字に折り曲げた鉢。  
 鉢A 1 底部に輪高台をもつ。  
 鉢A 2 底部が円盤作りである。  
 鉢A 3 底部が糸切りである。

鉢B 口縁部が体部から口縁部にかけて直線的にハの字に開く鉢。

鉢C 鉄鉢形の鉢。

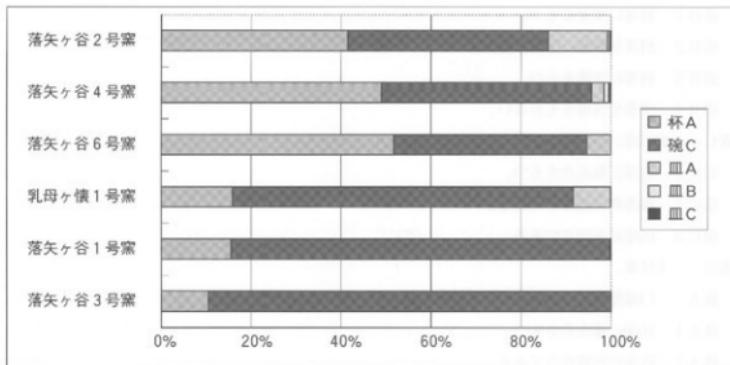
壺

### 3. 器種構成の変化

編年は既に述べたとおり森内、野村両氏によっておこなわれており、ここでは発掘調査資料に基づき検討した森内の編年を主として参考にする<sup>(4)</sup>。ただし、段階区分に若干の差異が存在するため、あらためてA～Dの4段階に区分した。

第9表 編年対照表

森内		野村	本吉	
		竹原3号窯		
第1段階 a期	西後明3号窯	I 西後明3号窯	A	西後明3号窯
第1段階 b期	西後明12号窯	II 西後明6号窯		
第2段階 a期	西後明23号窯	西後明23・41号窯	B	西後明23号窯
第2段階 a'期	西後明41号窯	西後明12号窯		西後明41号窯
第2段階 b期	入野6号窯・鶴亀2号窯	入野6号窯・鶴亀2号窯		入野6号窯・鶴亀2号窯
第2段階 b'期	西後明7号窯	西後明43号窯		西後明12号窯
第3段階 a期	落矢ヶ谷10号窯 落矢ヶ谷2号窯	III 緑ヶ丘一ノ谷10号窯 緑ヶ丘落矢ヶ谷2号窯 西後明11号窯	C1a	落矢ヶ谷10号窯 落矢ヶ谷2号窯
第3段階 b-1期	乳母ヶ懐3号窯	那波乳母ヶ懐3号窯	C1b	乳母ヶ懐3号窯
第3段階 b-2期				落矢ヶ谷6号窯
第3段階 b-3期	落矢ヶ谷1・3号窯	緑ヶ丘落矢ヶ谷1・3号窯	C 2	乳母ヶ懐1号窯 緑ヶ丘落矢ヶ谷1・3号窯
第3段階 c期	樺谷2号窯	IV 竹原1・6号窯 大陣原3号窯	D 1	大陣原3号窯
		竹原8・9号窯	D 2	竹原7号窯
		竹原7号窯		



第19図 供膳具の比率

碗・杯など個々器形の変化はそれほど明瞭ではないため、器種構成の変化を軸として組み立てられている<sup>(5)</sup>。

- A段階 平高台碗（碗B・C）出現以前の段階である。この時期に該当するのは西後明3号窯である。西後明12号窯については碗C、皿A、壺Aが出土しており、野村氏が述べるようにB段階に属するものと思われる<sup>(6)</sup>。
- B段階 平高台碗の出現を標識とする。他に皿C、壺Aなどの瓷器系の器種が加わる。この時期に該当する資料は西後明23号窯、西後明41号窯、入野6号窯、鶴龟1号窯、鶴龟2号窯、西後明7号窯である。
- 森内はこの時期を杯Bの比率の多少で前後の2段階（第2段階a・b）に分けている。ただし、後者については表掲資料のみで、実体はよく分からない。
- C段階 杯Bが消失する段階である。杯Aの出土量によって2時期に分かれる。また、この時期に皿Bが出現する。
- C1段階は杯Aと碗Cに比率がほぼ等しく、落矢ヶ谷2・4・6号窯がこの時期に該当する。落矢ヶ谷2・9~11号窯・乳母ヶ懐3号窯についても計数作業が行われていないが、この時期に該当するものと考えられる。C1段階は碗の法量分布によりさらに2つ（C1a・C1b）に分けることができる。また、C1b段階のなかでも壺C・D、鉢Aの器形変化などから落矢ヶ谷6号窯は相対的に新しい位置づけにあたるものと考えられる。
- C2段階は杯Aが圧倒的に少なくなり、落矢ヶ谷1・3号窯、乳母ヶ懐1号窯がこの時期に該当する。また、この時期にのみ碗C3が現れることも特徴的である。
- D段階 杯Aが消失する段階である。皿Bも消失し、小皿が現れる。小皿の有無や碗の法量によって、2つ（D1・D2）に分かれる。D1段階に該当するのは大陣原3号窯、D2段階に該当する竹原7号窯である。

#### 4. 器形の変化

ここでは今回資料が得られた落矢ヶ谷6号窯、乳母ヶ懐1号窯を含めて発掘資料が比較的遺されているC・D段階について検討する。

##### 碗C

C 1 a段階 口径は12~15cm前後のものが多く、16cm以上のものがわずかに存在する。ただし、碗D 1には口径20cm程度の大型のものが存在する。高台脇をヘラナデにより調整を行い、体部と底部の境がはっきりしている。

C 1 b段階 口径は12~17cmのものと、17cm以上のものに分かれれる。全体的に碗が大型化するといえる。口縁端部が外反するものが顕著に認められる。高台脇をヘラナデにより調整を行い、体部と底部の境がはっきりしたものが多い。

C 2段階 口径は12~17cmの範囲におまり、17cm以上のものはほとんど無くなる。また、10~11cm程度の小型のものも現れる。全体的に小型になる。高台脇は回転ナデ調整がなされ、体部と底部の境がはっきりしないものが多い。

D 1段階 口径14~17cmのものと口径12~14cmのものに分かれ、さらに口径10cm以下の小碗が見られる。高台の高台脇は回転ナデ調整がなされ、体部と底部の境がはっきりしないものが多い。

D 2段階 14~16cm程度に収まり、小型の器形も見られなくなる。また、器高も1cm程度低くなっている。高台はほとんど認められない。

##### 杯A

C 1 a段階 口径12~15cm、器高2~4cmのものが多い。

C 1 b段階 口径12~15cm、器高3~4cmのものが多く、やや器高が高い。

C 2段階 口径11~13cm、器高3~4cmのものが多く、口径が明瞭に縮小している。

##### 皿A

C 1 a段階 口径15~18cmである。

C 1 b段階 口径13~16cmで、口径は縮小している。

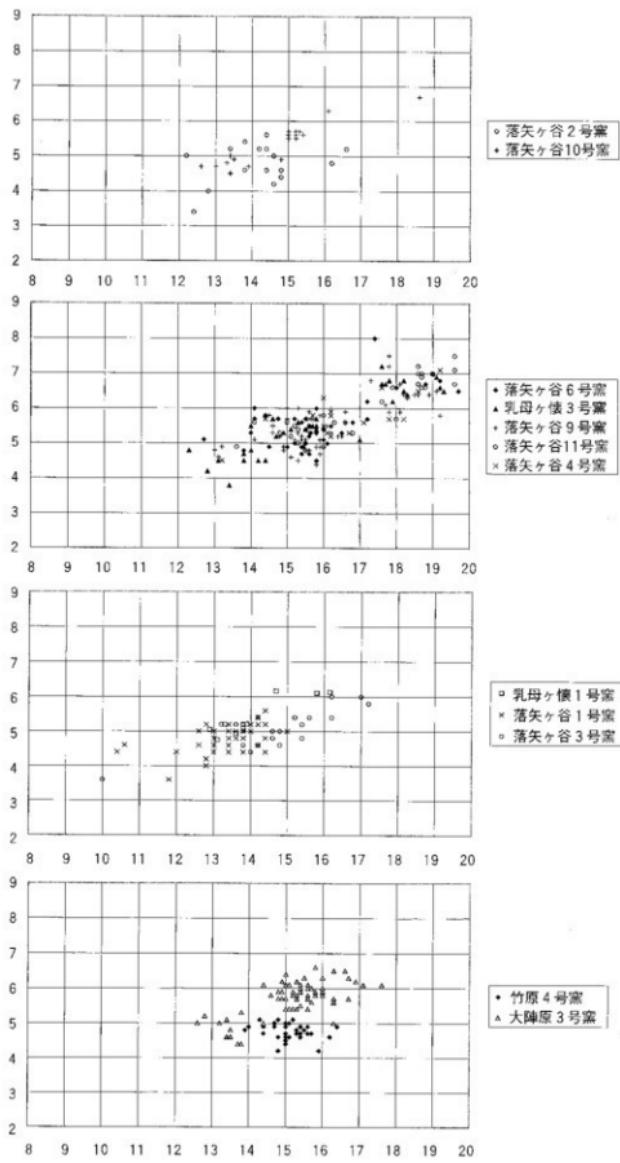
##### 皿B

C 1段階 口径13~15cmのものが多い。

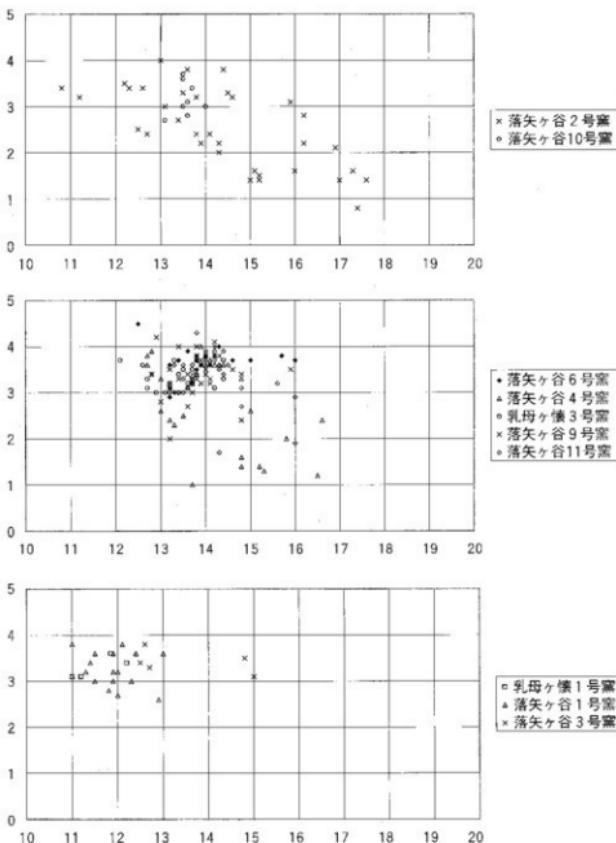
C 2段階 口径10cm程度であり、口径は縮小している。

壺B 明瞭な形態変化を追えるほど資料は多くない。耳はB段階の棒状のものからC段階にY字状のものに代わる。突帯はC 1段階までは断面台形のものが多いが、C 2段階には断面3角形のものが多くなる。

壺C C 1 b段階の乳母ヶ懐3号・落矢ヶ谷11号窯では肩部が高い位置にあったものが、C 1 b段階の落矢ヶ谷9号窯・6号窯ではなだらかになり、C 1 b段階の落矢ヶ谷6号窯・D段階の大陣原3号窯では体部中位が張ったような形態になっている。壺Dや鉢Aなどの変化とともに落



第20図 槌Cの法量



第21図 杯A・皿Aの法量

矢ヶ谷6号窯がC1b段階の中でも比較的新しいものであることを示している。

臺D C1a段階の落矢ヶ谷2号窯やC1b段階の乳母ヶ懐1号窯では体部が下膨れであったものが、C1b段階の落矢ヶ谷6号窯では倒卵形のものに変わっている。

鉢A・B 鉢AはC1段階にはほとんど明瞭な変化は認められない。C1b段階の落矢ヶ谷6号窯では器壁が薄く、大型の碗の端部を折り曲げたような形態のものが現れる。C2段階に厚手の製品は体部が直線的に開く鉢Bに変わる。

		椀 C 1	椀 C 2	椀 D 1	杯 A	皿 A	皿 B 耳皿
	落矢ヶ谷 10号窯						
C	1						
a	落矢ヶ谷 2号窯						
	乳母ヶ懐 3号窯						
	落矢ヶ谷 11号窯						
C	1						
b	落矢ヶ谷 9号窯						
	落矢ヶ谷 1号窯						
	落矢ヶ谷 4号窯						

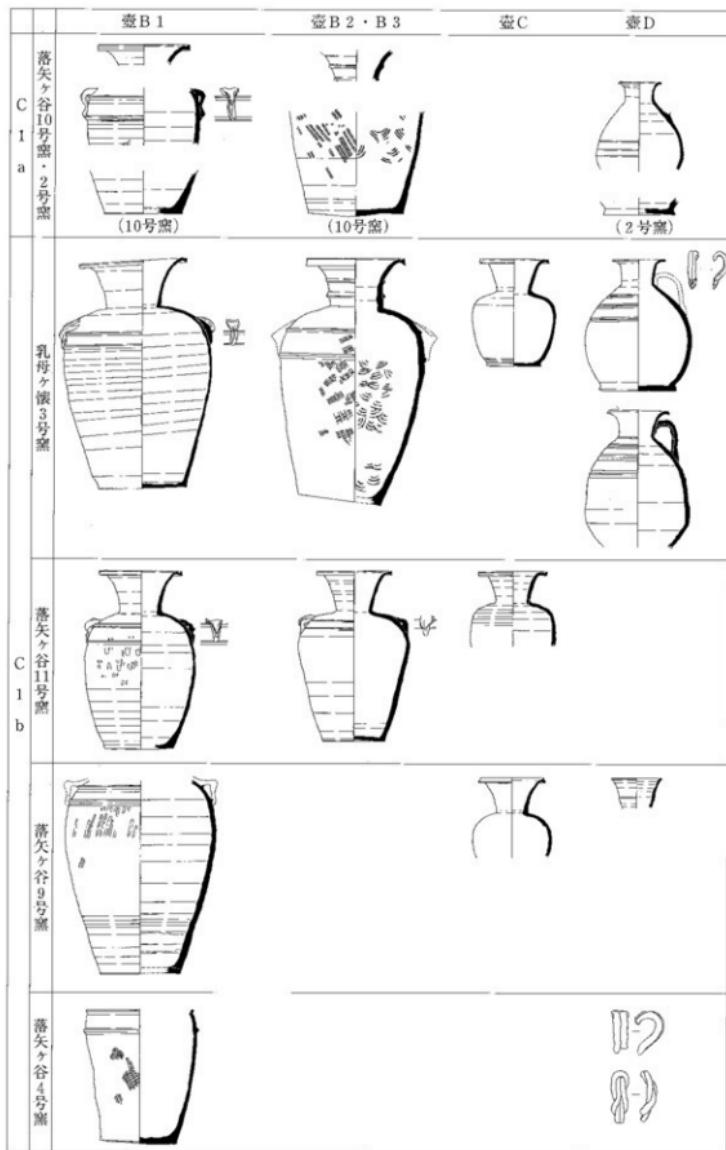
第22図 C・D段階の須恵器（1）

	椀 C 1・小椀	椀 C 3	椀 D 1・D 2	杯 A	皿 B	小皿 耳皿
C 1 b						
C 2						
D 1						
D 2						

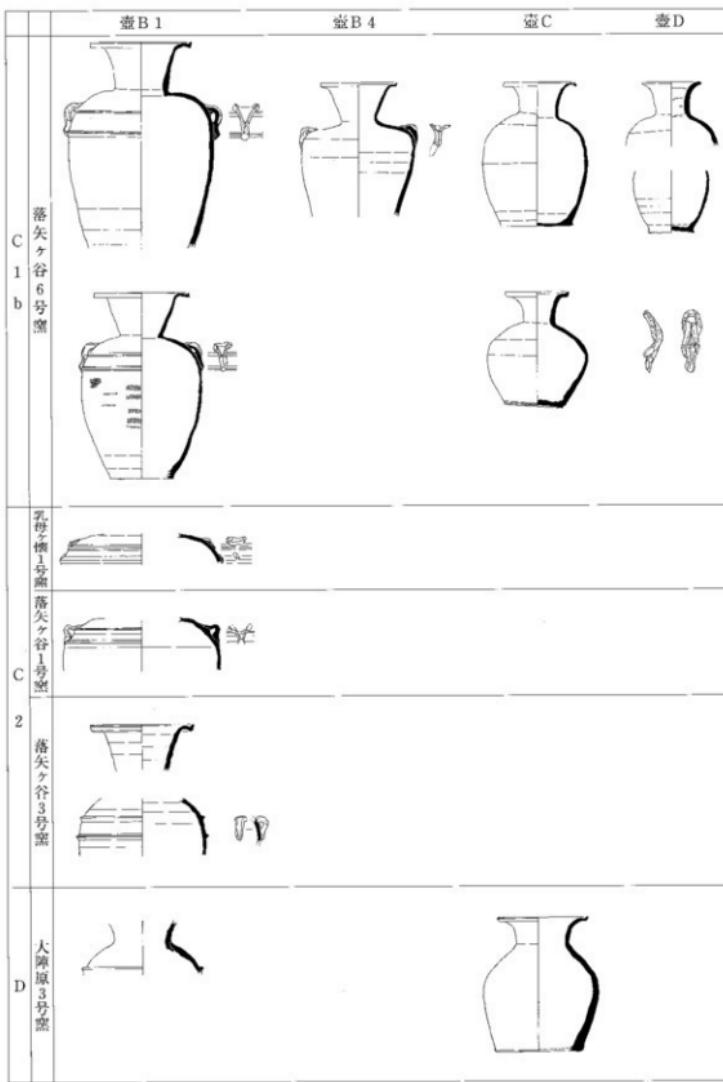
第23図 C・D段階の須恵器（2）

要

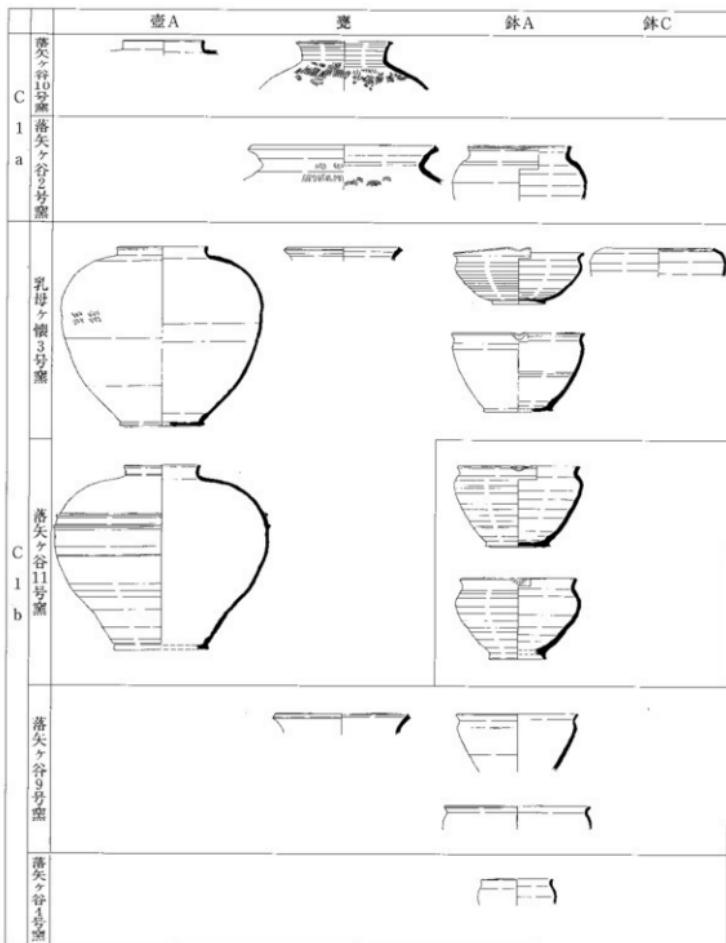
C段階には口縁端部は面をもち、タタキ目が格子であったものが、D段階には口縁端部が丸味をもち、タタキ目が平行に変わる。



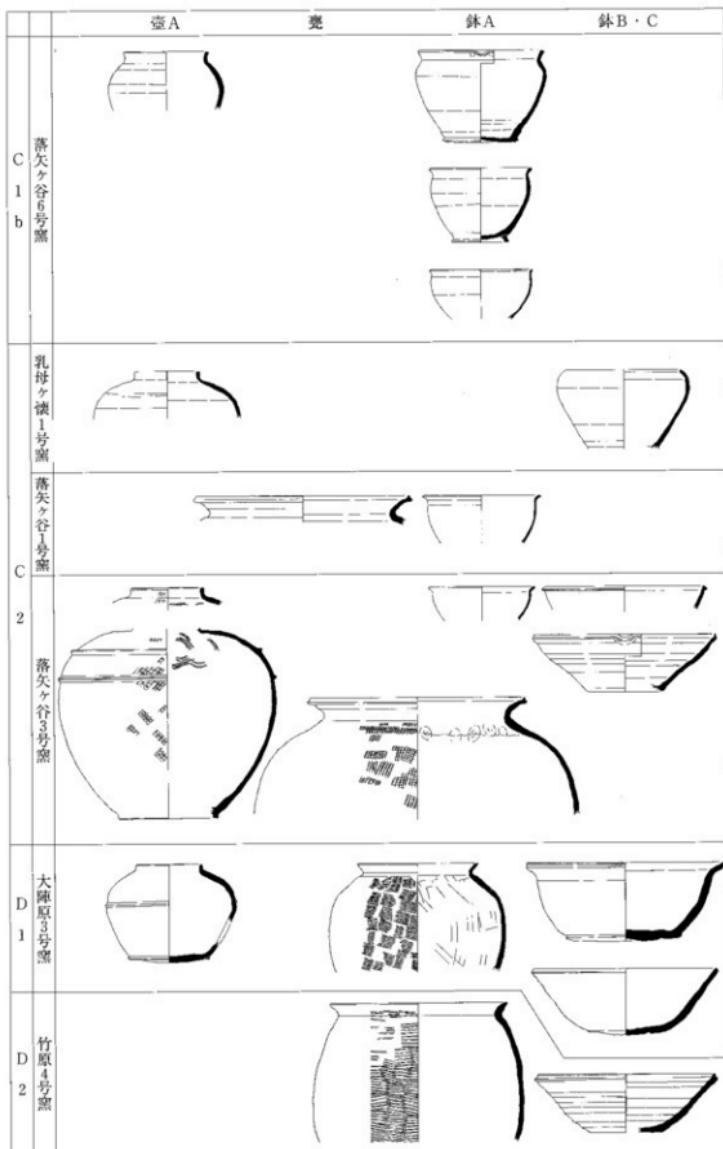
第24図 C・D段階の須恵器 (3)



第25図 C・D段磨の須恵器 (4)



第26図 C・D段階の須恵器（5）



第27図 C・D段階の須恵器（6）

## 第2節 遺構について

今回検出されたのは窯体2基であるが、基本的にはこれまで落矢ヶ谷支群で調査された窯跡と同様の特徴をもつものである。

### 1. 緑ヶ丘6号窯

落矢ヶ谷6号窯はほとんど地上式の窯窓で、床面は深いところで約30cm掘り込まれている。規模は全長約8m前後と推定され、燃焼室幅1.0m、焼成室幅1.1mで、床面傾斜角度は焼成部で24度である。規模・形態はやや幅が狭いものの落矢ヶ谷4号窯（全長7.2m、最大床幅1.64m、床面傾斜角度24°）に近いものといえる。

また、燃焼部の床面下（1つのみ燃成室側壁）で窯体構築時の支柱の痕跡が検出されている。このような支柱は、落矢ヶ谷4号窯でも側壁で1ヶ所確認されているが、基本的に燃焼室部分で用いられているようである。

### 2. 乳母ヶ懐1号窯

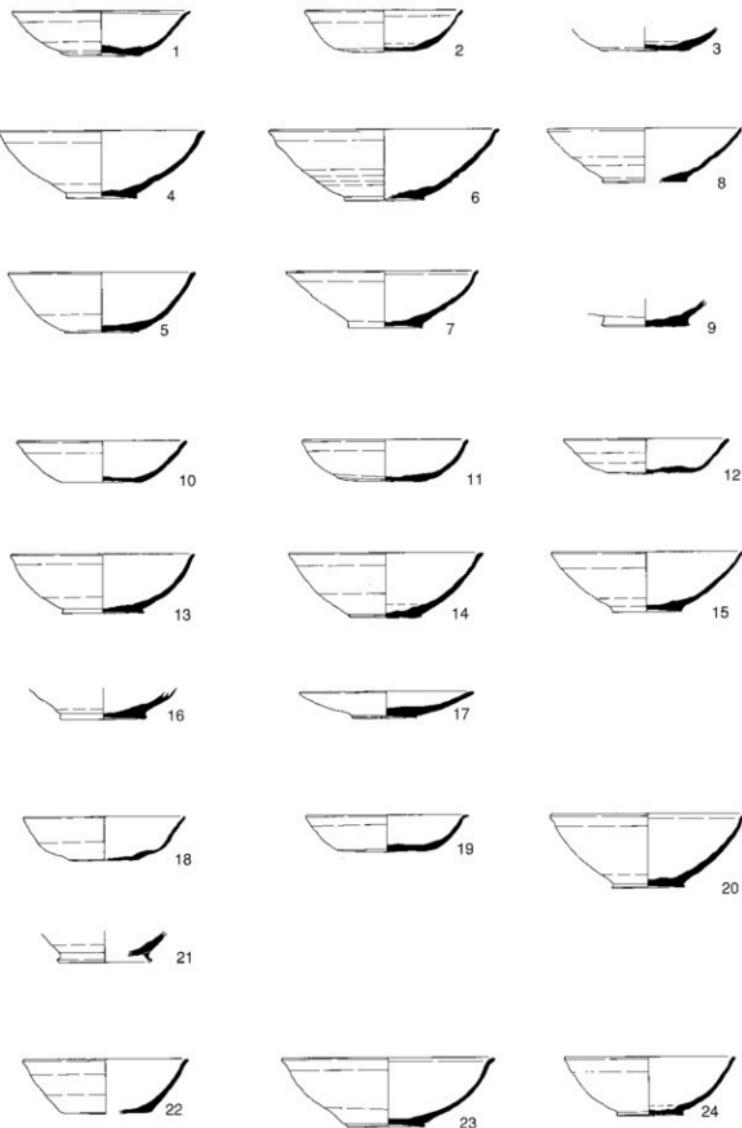
乳母ヶ懐1号窯はほとんど床面しか残存しないが、地上式の窯窓と考えられる。燃焼部に近い部分が損壊されていることから地山掘り込みの有無は確認できない。規模は全長4.1m以上、床面幅は最も残りの良い部分が1.1mで、床面傾斜角度は19°である。規模・形態は、乳母ヶ懐3号窯（全長4.5m、最大床幅1.3m、床面傾斜角度24°）に近いものといえる。

- (1) 森内秀造「兵庫県相生古窯址群について」『日本史論叢』第10輯 1983年
- 森内秀造「平安時代の窯業生産」『歴史における政治と民衆』 1986年
- 森内秀造「緑ヶ丘窯址群の須恵器の特徴と編年」『相生市・緑ヶ丘窯址群』 1986年
- 森内秀造「相生窯址群における平安期の須恵器について」『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』 1995年
- (2) 岸本道昭「瓦溜め出土土器の時期」『布勢駅家』 1992年
- 岸本道昭「布勢駅家廃絶期の土器」『布勢駅家Ⅱ』 1992年
- (3) 野村辰右「相生・龍野古窯跡群について」『ひょうご考古』第7号 2001年
- (4) 森内秀造「相生窯址群における平安期の須恵器について」『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』 1995年
- (5) 以下、各窯跡出土資料については発掘調査によるものが第3表、表採資料によるものが以下の文献を参照されたい。
  - 森内秀造「窯跡資料」『相生市史』第5巻 1989年
  - 野村辰右「相生・龍野古窯跡群について」『ひょうご考古』第7号 2001年
- (6) 野村辰右「相生・龍野古窯跡群について」『ひょうご考古』第7号 2001年

# 図 版

落矢ヶ谷 6号窯出土須恵器（1）

図版1



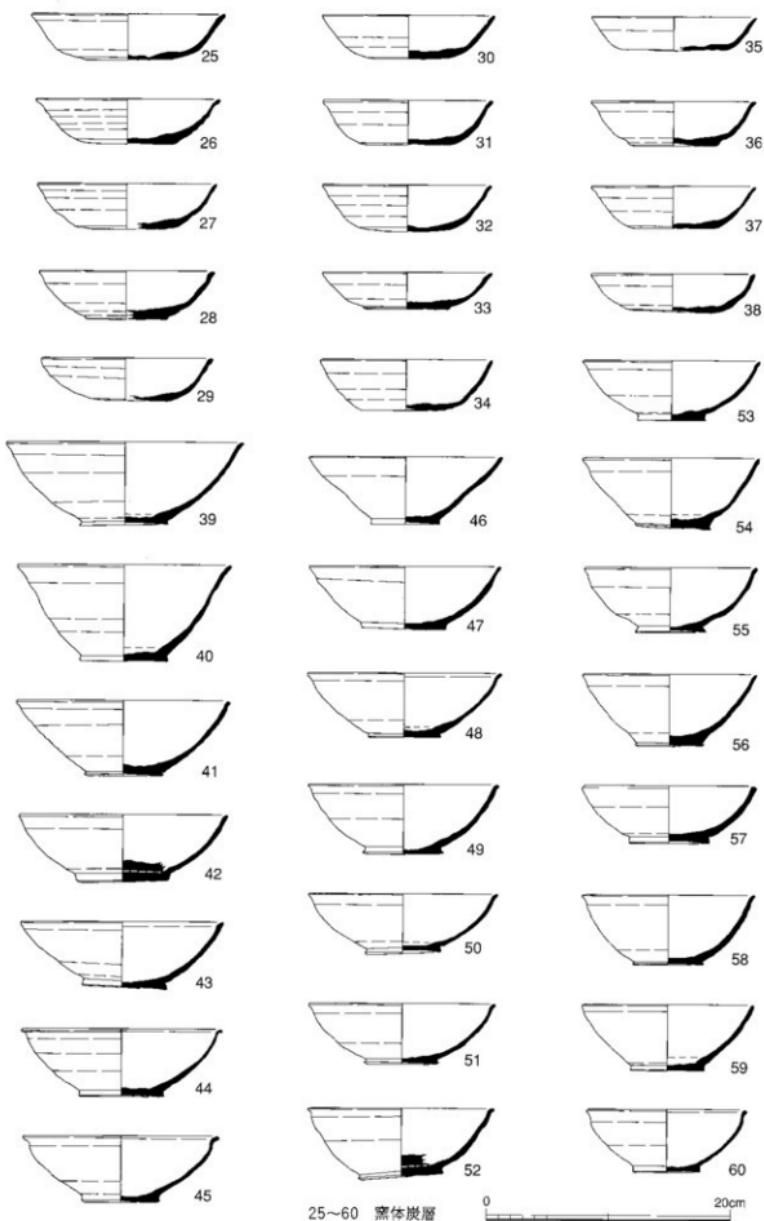
1~9 窯体床面  
10~17 窯体赤褐色土

18~21 窯体炭層  
22~24 窯体

0 20cm

図版2

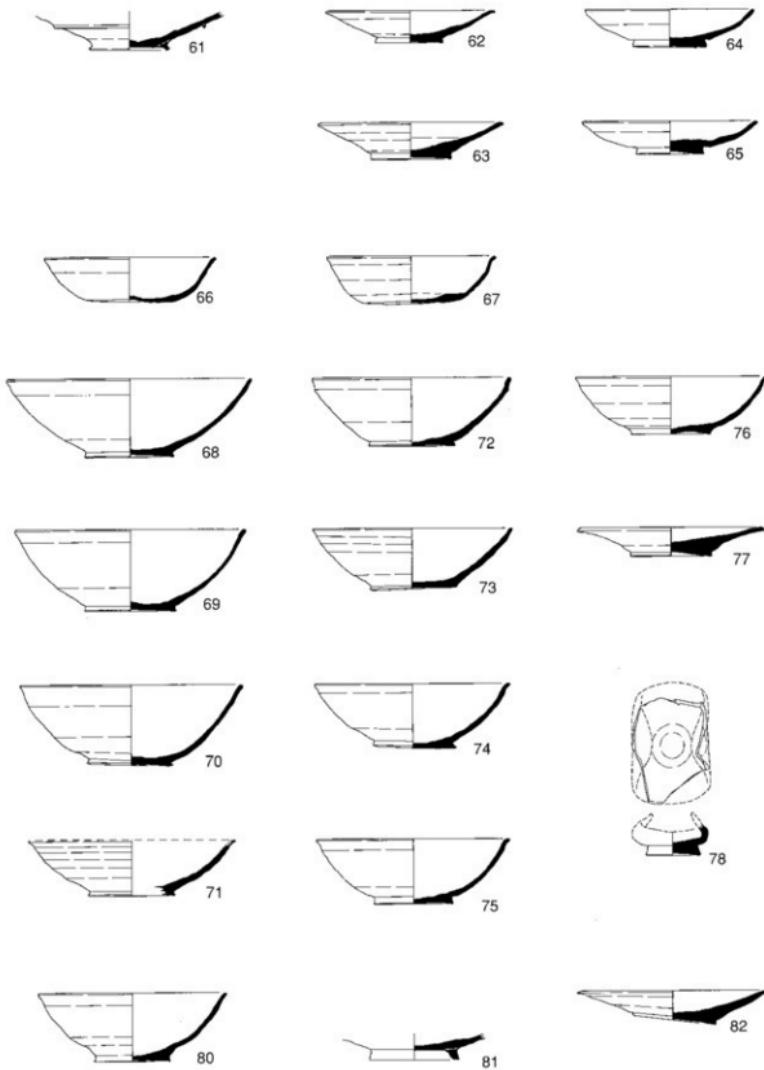
落矢ヶ谷6号窯出土須恵器(2)



25~60 窯体炭層

落矢ヶ谷6号窯出土須恵器（3）

図版3

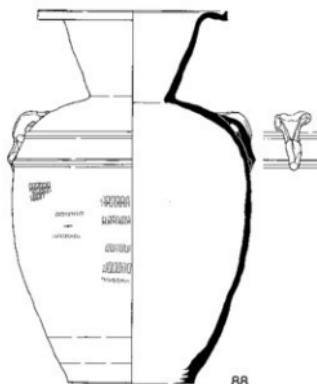
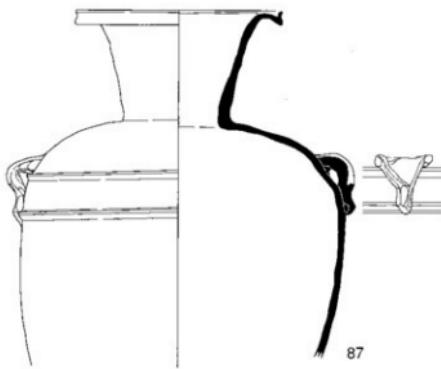
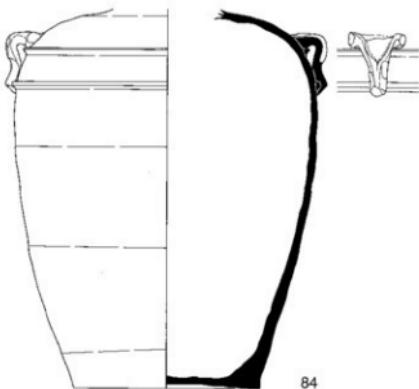
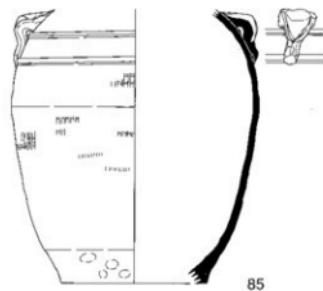
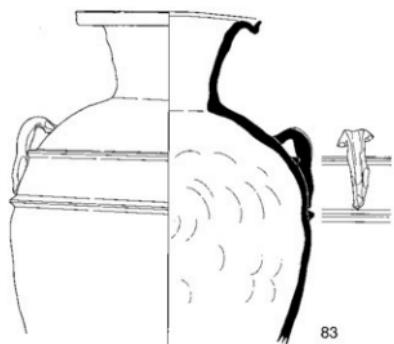


61~65 灰原炭層  
66~78 灰原褐灰色土  
80~82 表土

0 20cm

図版4

落矢ヶ谷6号窯出土須恵器（4）

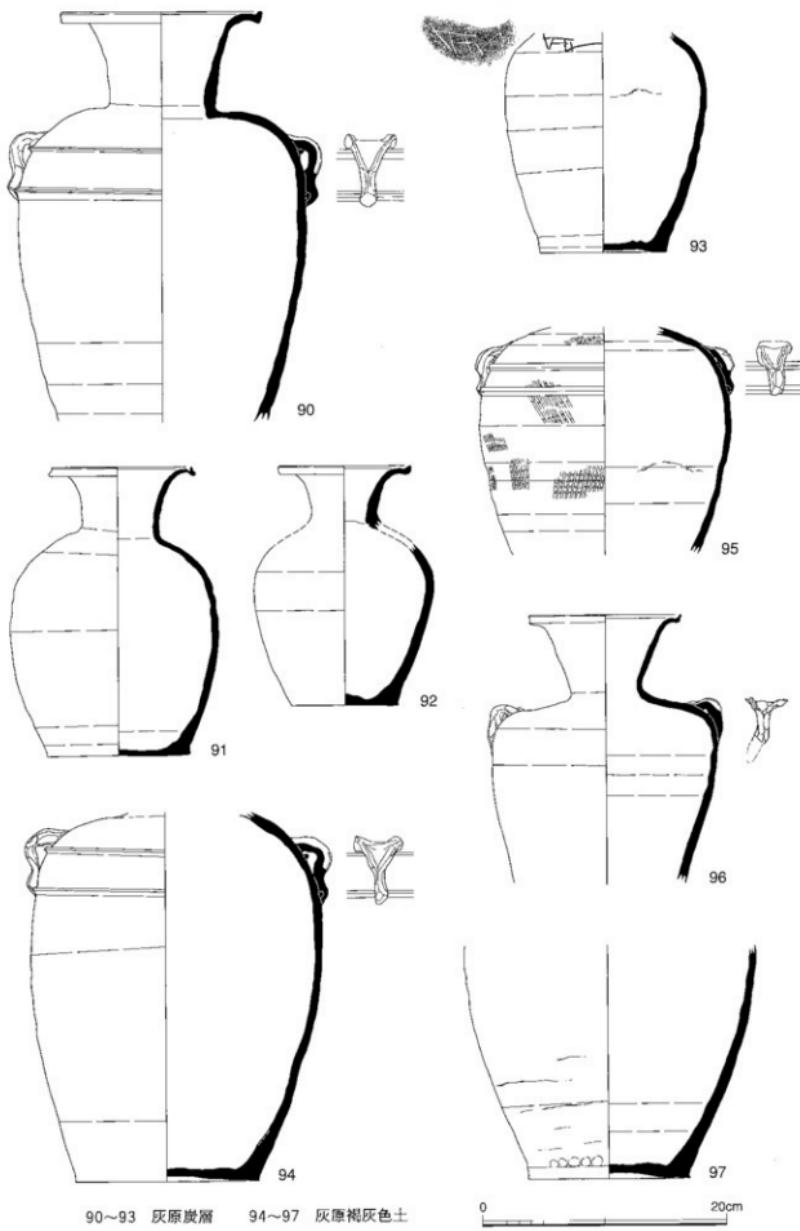


83 炭体炭層

84~86 炭体

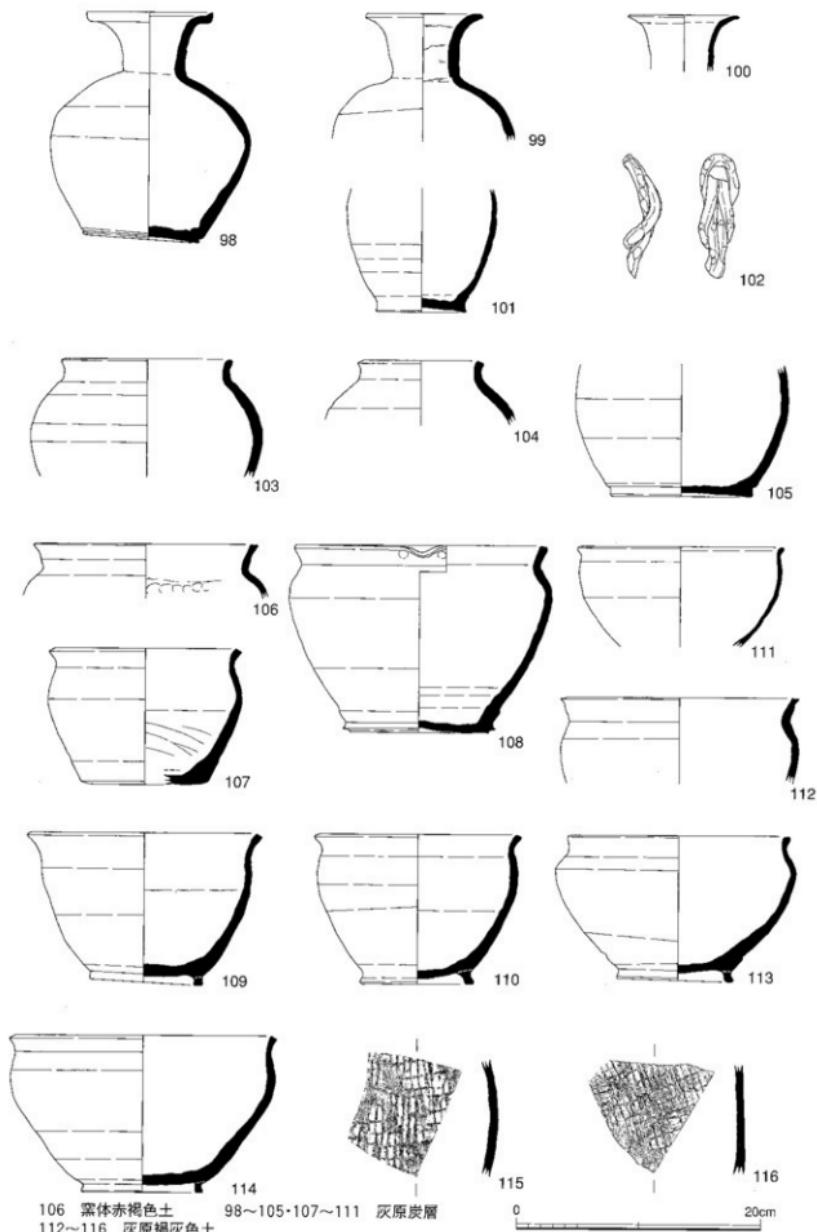
87~89 灰原炭層

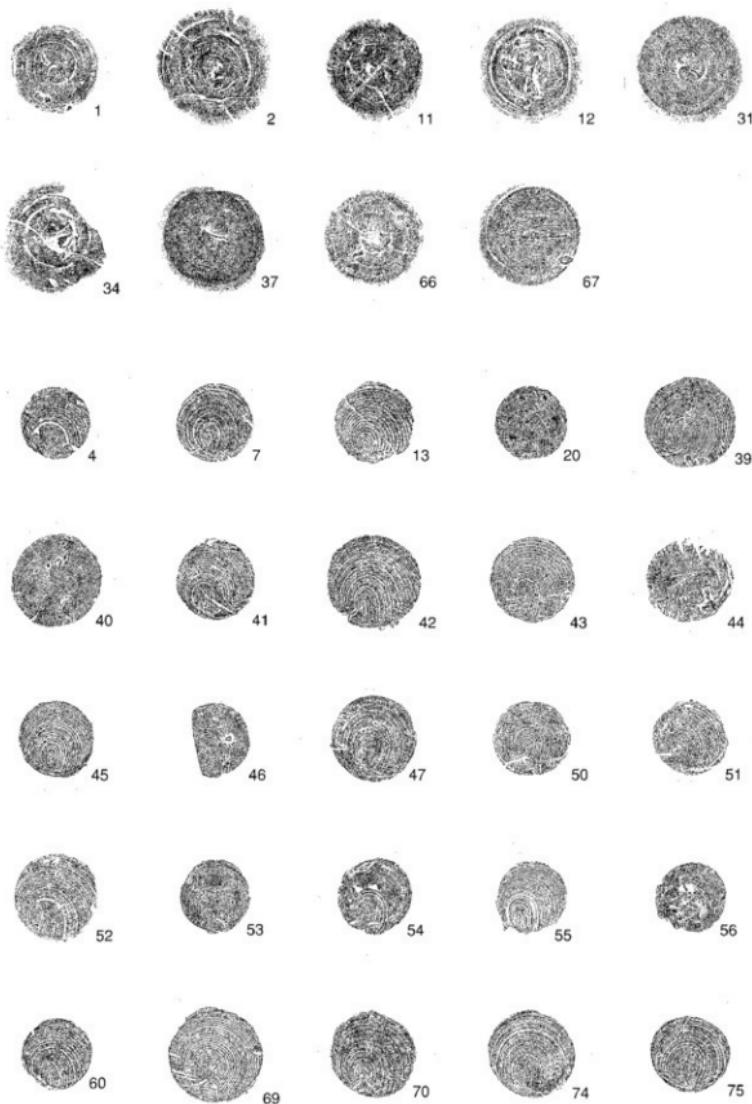
0 20cm



図版6

落矢ヶ谷6号窯出土須恵器(6)





0 20cm



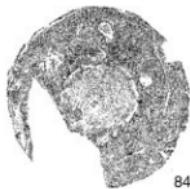
62



65



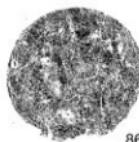
78



84



89



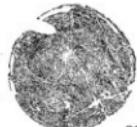
86



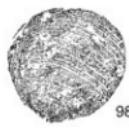
91



92



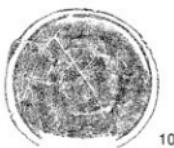
93



98

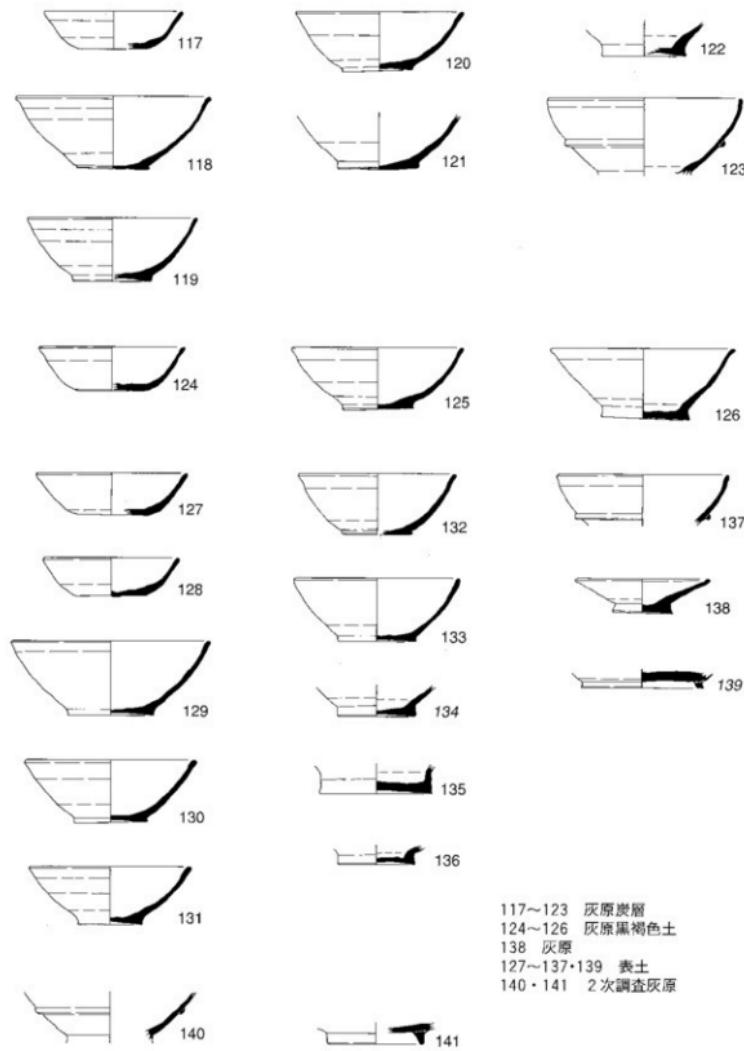


105



108





117~123 灰原炭層

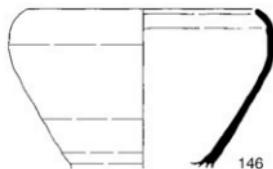
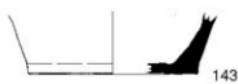
124~126 灰原黒褐色土

138 灰原

127~137・139 表土

140・141 2次調査灰原





142・143・145・146 表土  
144 2次調査灰原

0 20cm



0 20cm

# 写 真 図 版



相生窯跡群遠景（南東から）



緑ヶ丘地区遠景（北東から）

## 写真図版2

落矢ヶ谷 6号窓



遠景（北東から）



調査区全景（南東から）



窯体・灰原全景（南東から）



窯体全景（南東から）



窯体全景（南東から）



窯体床面遺物出土状況（南東から）



窯体埋土断面（南東から）



窯体断ち割り断面（南から）



窯体支柱検出状況（北西から）

## 写真図版6

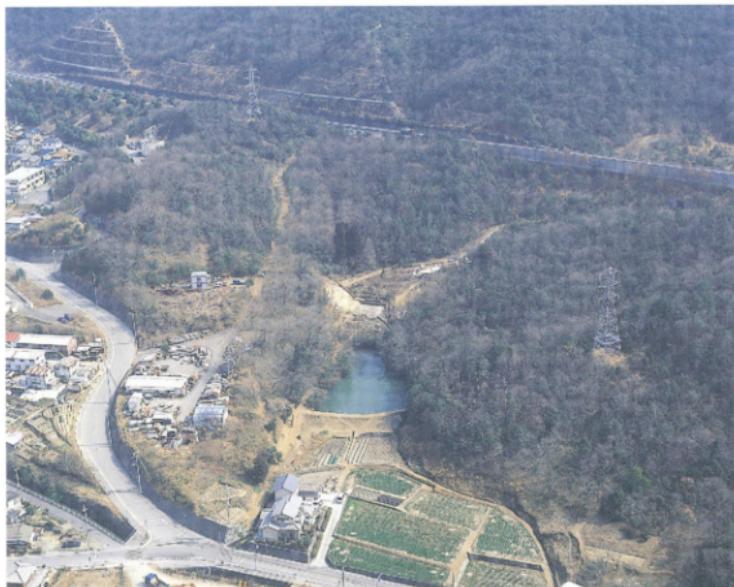
### 落矢ヶ谷 6号窯



灰原検出状況（南東から）



灰原断面（南東から）



遠景（西から）



全景（西から）



窯体全景（南から）



窯体断ち割り断面（南から）



灰原断面（北から）



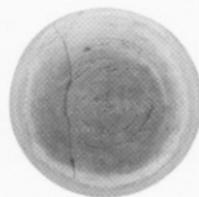
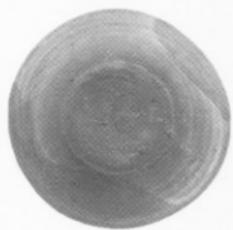
落矢ヶ谷 6号窯 出土須恵器



乳母ヶ懐 1号窯 出土須恵器

写真図版10

落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器（1）



1

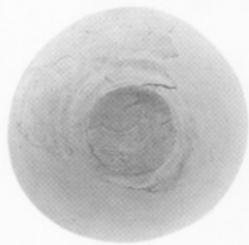
2

3

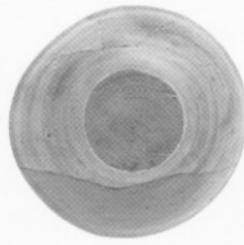
5



6



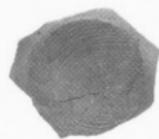
4



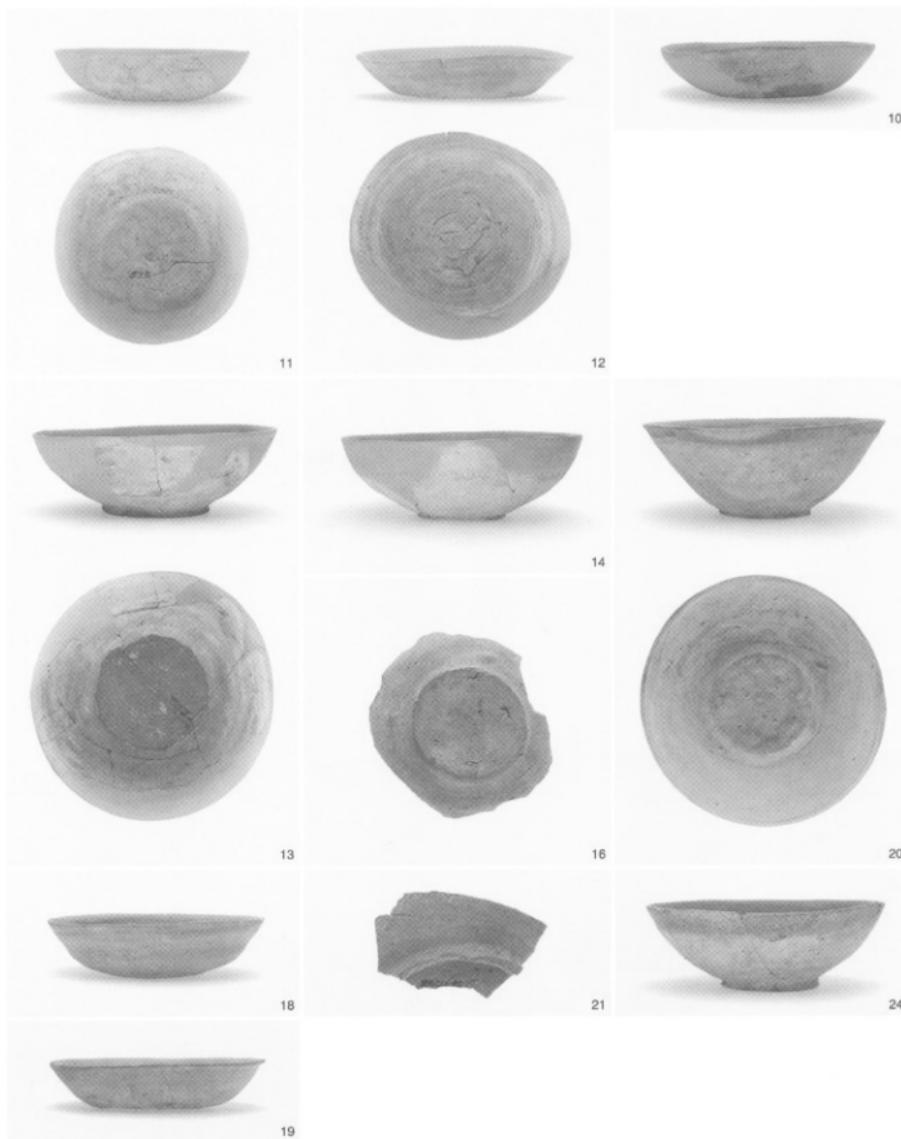
7



8



9



写真図版12

落矢ヶ谷6号窯 出土須恵器（3）



25



26



27



29



36



38



31



34



37



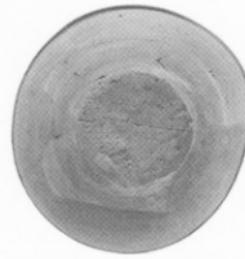
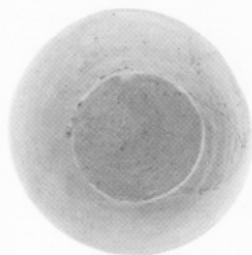
39



40



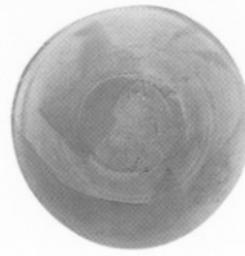
41



42

43

44



45

46

47



48

49

写真図版14

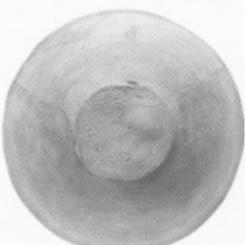
落矢ヶ谷 6号窯 出土須恵器 (5)



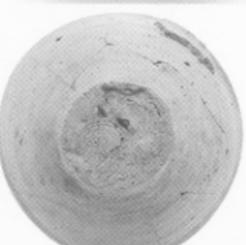
50

51

52



53

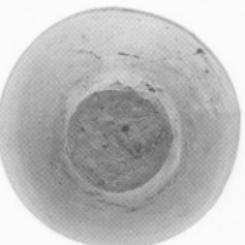


54

55



56



56



57



61



64



62



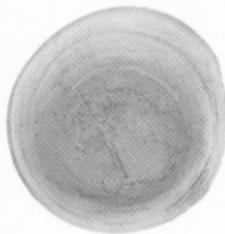
65



68



66



67



72



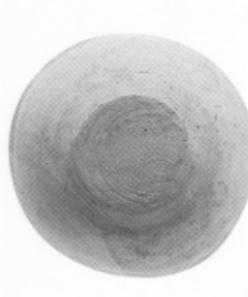
73



69



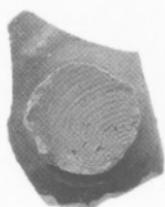
70



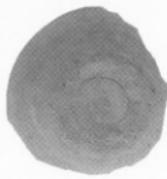
74



75



78



79



77



82



80



81



85



86



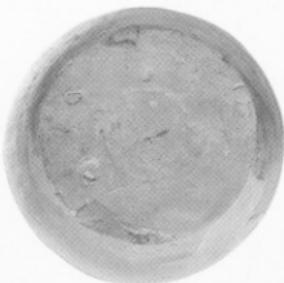
83



84



87



88



88



90



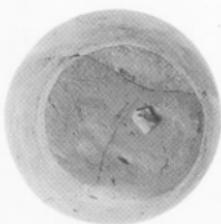
89

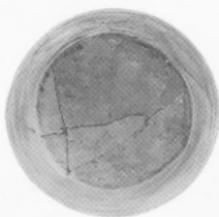


91



92





93



94



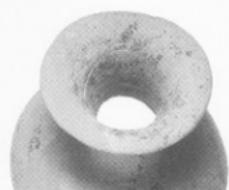
95



96



97



99

100



101



102



103



104



107



109



108



110



111



114



113



115



116



117



118



121



119



120



122



123



124



125



126



127



128



129



130



131



132



134



133



135



136



136



138

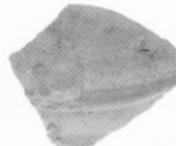


141

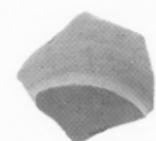
139



140



142



144



145



146

## 報告書抄録

ふりがな	みどりがおかようしぐんⅢ								
書名	緑ヶ丘窯址群Ⅲ								
副書名	一般県道竜泉那波線道路新設事業に伴う発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告								
シリーズ番号	第253冊								
編著者名	池田征弘・脇部寛								
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所								
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL. 078-531-7011								
発行年月	西暦2003年(平成15年)3月								
所取遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積	北緯	東經	調査原因	
		市町村	調査番号						
みどりがおかようしぐん 緑ヶ丘窯址群	兵庫県相生市 那波字袋地 206-14ほか	28208	970312	19970911	770m <sup>2</sup>	34°49'17"	134°27'34"	一般県道竜泉那波線道路新設事業	
			980220	19990120	861m <sup>2</sup>				
				19990318					
			990218	19990916	60m <sup>2</sup>				
種別	主な時代	主な遺物		主な遺物	特記事項				
窯跡	平安時代	落矢ヶ谷6号窯		須恵器					
		乳母ヶ懃1号窯		須恵器					

---

兵庫県文化財調査報告 第253冊

### 相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅲ

一般県道竜泉那波線道路新設事業に伴う  
発掘調査報告書

2003(平成15)年3月発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL. 078-531-7011

発 行 兵 庫 県 教 育 委 員 会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 福 田 印 刷 工 業 株 式 会 社

〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号

---